

熊野八反田遺跡

—学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書—

2015

甲州市教育委員会

熊野八反田遺跡

—学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書—

2015

甲州市教育委員会



熊野八反田遺跡から塙山市街地を望む



熊野八反田遺跡調査区全景



土坑に埋納された大型壺

序

本書は学校給食センター建設に伴って発掘調査が実施された、甲州市塩山熊野に所在する熊野八反田遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査により、今から約 1600 年前（古墳時代前期）の集落の一部が発見されました。確認された遺構は、竪穴住居跡 5 軒、溝跡 58 本、土坑 1 基、ピット（小穴）41 基で、竪穴住居のうち 1 軒は火災等により焼失したと考えられるもので、そこからは当時使われた土師器と呼ばれる土器が数多く検出されました。多くは住居が焼け落ちた後に投げ込まれたもので、火を鎮火した後に供獻行為として土器を投げ入れた跡と考えられます。また、流路跡と考えられる大型の溝からも、壺や甕などの完形土器が発見されました。これらも単に廃棄されたものではなく、水に関わりのある祭祀の跡とも見て取れます。火や水は人類にとって益をもたらすものであると同時に、災いをもたらす存在でもありました。こうした供獻などの行為は、当時この地に暮らしていた人々が、火や水に対して、畏敬の念を抱いていたことの表れであるとも言えるでしょう。

このように古くから歴史のあるこの地域で、私たちの遠い祖先が暮らしてきた熊野八反田遺跡の報告書を刊行できたことは喜ばしい限りであり、この報告書が本市の歴史を深く考究するための基礎資料となれば幸いです。

最後となりましたが、遺跡発掘調査ならびに報告書作成に關係して、多大なるご理解とご協力を賜った関係諸機関および関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日

甲州市教育委員会

教育長 保坂 一仁

例 言

1. 本書は山梨県甲州市塩山熊野字八反田 958-1 他に所在する熊野八反田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、学校給食センター建設に伴う発掘調査であり、甲州市教育委員会が調査を行った。
3. 発掘調査の主体は甲州市教育委員会であり、発掘調査は入江俊行（甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当）が担当した。
5. 発掘調査は平成 25 年 7 月 10 日～9 月 26 日、整理作業は平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月にかけて行われた。
6. 本書の執筆・編集は入江が行った。自然科学分析については株式会社パレオ・ラボに委託し、その報告原稿を第 4 章に掲載した。
7. 発掘調査における基準点測量・空中写真撮影・全体図作成業務を株式会社テクノプランニングに、炭化材の樹種同定・年代測定・種実分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 調査で得られた記録写真・図面および出土遺物は、甲州市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から報告書作成に至るまでの間、以下の諸氏、諸機関のご協力・ご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である。（順不同・敬称略）
櫛原功一・宮澤公雄（公益財団法人山梨文化財研究所）、正木季洋・米田明訓（山梨県埋蔵文化財センター）、稲垣自由（大月市教育委員会）、森谷忠・柴田直樹（株式会社テクノプランニング）、森将志（株式会社パレオ・ラボ）、三枝哲雄（三枝興業）、山梨県埋蔵文化財センター、株式会社峠南堂印刷所、甲州市教育委員会教育総務課、甲州市学校給食センター

凡 例

1. 本書で図示した地図類は真上北である。
2. 本書に掲載された図のスケールは各図中に示した。
3. 本書第 2 図は甲州市都市計画基本図（S = 1/2,500）を、第 3 図は国土地理院発行の 1:25,000 地形図「塩山」を改変して使用した。
4. 調査区全体図等（第 4～11 図）における X・Y 数値は世界測地系座標に基づくもので、各遺構平面図中にある方位を示す記号は真北を示している。また、グリッドは座標に基づいて 5 m メッシュとした。
5. 遺構平面図中、スクリーントーンを用いたものは、遺構中に検出された礫または炭化材を示し、薄い方は礫、濃い方は炭化材を示す。土器のスクリーントーンは黒班を示す。
6. 遺物出土状況図中にある●は土器、□は炭化物を示す。
7. 写真図版中にある「30-1」等の数字は「第 30 図の 1」を示し、遺物の実測図に対応する。
8. 遺物観察表中の色調名は、農林水産省農林水産技術会議事務所監修『新版 標準土色帖』2014 年度版による。

本文目次

第1章 経過	
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	8
第3節 遺構	9
(1) 壴穴住居跡	9
(2) 溝跡	10
(3) 土坑	15
(4) ピット	16
第4節 遺物	17
第4章 自然科学分析	
第1節 熊野八反田遺跡出土炭化材の樹種同定	23
第2節 放射性炭素年代測定	28
第3節 熊野八反田遺跡出土の炭化種実	31
第5章 総括	
第1節 熊野八反田遺跡の年代について	33
第2節 燃失住居について—鉛火祭祀の可能性—	33
第3節 並行溝群の性格について	34
第4節 36号溝と1号土坑—流路廃絶に伴う供獻行為についての考察—	34
第5節まとめ	36

図版目次

第1図 甲州市の位置	5 第17図 3・4号住居断面図・5号住居平面図	51
第2図 調査区位置図	5 第18図 5号住居断面図・遺物出土状況図	52
第3図 周辺の遺跡包蔵地	6 第19図 1・35号講断面図	53
第4図 調査区全体図	38 第20図 31・53号溝・1号土坑断面図・36号溝断面図	54
第5図 調査区分割指示図	39 第21図 36号講平面図	55
第6図 分割図①	40 第22図 36号溝遺物出土状況図(甕以外)	56
第7図 分割図②	41 第23図 36号溝遺物出土状況図(甕)	57
第8図 分割図③	42 第24図 1号住居出土遺物(1)	58
第9図 分割図④	43 第25図 1号住居出土遺物(2)	59
第10図 分割図⑤	44 第26図 2・3号住居出土遺物	60
第11図 分割図⑥	45 第27図 5号住居・1号溝・36号講出土遺物	61
第12図 1号住居断面図	46 第28図 36号溝出土遺物(1)	62
第13図 1号住居遺物出土状況図(甕以外)	47 第29図 36号溝出土遺物(2)	63
第14図 1号住居遺物出土状況図(甕)	48 第30図 36・52・53号溝・構造外・表探遺物	64
第15図 2号住居断面図	49 第31図 1号土坑出土遺物(1)	65
第16図 3・4号住居平面図・遺物出土状況図	50 第32図 1号土坑出土遺物(1)	66

表 目 次

第1表 遺跡包藏地一覧表	7
第2表 ピット一覧表	16
第3表 住居内ピット一覧表	17
第4表 遺物観察表	20

写 真 図 版

- 図版 1 調査前風景・表土掘削・1号住居調査風景・1号住南西隅遺物出土状況・1号住居遺物出土状況
図版 2 1号住居遺物出土状況
図版 3 1号住居遺物出土状況・1号住居出土遺物・1号住居1ピット土層断面・1号住居1ピット出土ミニチュア土器・1号住居土層断面・1号住居完掘状況
図版 4 2号住居遺物出土状況・3・4号住居床面検出状況
図版 5 3号住居調査風景・3号住居遺物出土状況・3号住居出土遺物・3号住居炉跡検出状況・3号住居炉跡土層断面・3・4号住居土層断面・3号住居完掘状況
図版 6 5号住居土層断面・5号住居完掘状況
図版 7 5号住居遺物出土状況・5号住居炉跡土層断面・1号溝完掘状況・1号溝 A-A'・B-B'・C-C' 土層断面・並行溝群検出状況・並行溝群調査風景
図版 8 並行溝群完掘状況
図版 9 35号溝完掘状況・35号溝 A-A'・B-B' 土層断面・31号溝土層断面・33号溝遺物出土状況・34号溝完掘状況
図版 10 36号溝遺物出土状況・36号溝土層断面
図版 11 36号溝遺物出土状況・36号溝出土遺物・36号溝調査風景・36号溝礫集中部分・36号溝礫集中部分出土遺物
図版 12 36号溝出土遺物・36号溝完掘状況・40号溝・22～25ピット完掘状況・調査区北壁と24号溝土層断面・空掘状況
図版 13 1号土坑検出状況・1号土坑土層断面
図版 14 1号住居出土遺物
図版 15 1号住居出土遺物
図版 16 1号住居出土遺物
図版 17 1号住居出土遺物・2号住居出土遺物・3号住居出土遺物
図版 18 3号住居出土遺物・5号住居出土遺物
図版 19 1号溝出土遺物・36号溝出土遺物
図版 20 36号溝出土遺物
図版 21 36号溝出土遺物
図版 22 36号溝出土遺物
図版 23 36号溝出土遺物
図版 24 36号溝出土遺物・52号溝出土遺物・53号溝出土遺物・遺構外・表採・1号土坑出土遺物

第1章 経過

第1節 調査の経過

平成24年度、安心・安全で質の高い学校給食の提供、地産地消の推進や食文化の継承、教育・学習などを通じた食の学びの場を提供する目的で、甲州市塩山熊野字八反田地内に学校給食センターの建設が計画された（第2図）。これに伴い、甲州市教育委員会は平成24年12月及び平成25年3月の2回に分けて、建設予定地内において試掘調査を実施したところ、古墳時代～平安時代のものと考えられる遺構・遺物を検出した。

平成25年7月、甲州市教育委員会は学校給食センターの建設工事に先立ち、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を実施する運びとなり、記録的な酷暑の中、センター建設予定地約1600m²を対象として、7月中旬から9月末頃まで調査を遂行した。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は、事前の試掘調査によって判明している遺構面の高さまで、重機による表土掘削を行った。表土掘削は残土置き場を敷地西側と南側に設定したため、東側から順次掘削を行い、表土が除去できた部分から、人力で遺構確認作業を行った。

調査区の東側は遺構が少なかったが、遺物の集中する箇所（1号住居）を発見したため、この高さを基準として全体の表土掘削を行った。調査区北側では小規模な溝跡を多数検出し、中央部分では住居跡を検出した。調査区南西では褐灰色の砂質土が面的に広がっている部分がみられ、当初は地山と捉えたが、人力によって掘り下げてみたところ、砂質土の下に遺物を含む黒色土層（36号溝）を検出した。このことから、南西側が北東側に比べて低く傾斜していることが分かった。また、遺構検出面は明灰褐色の砂質土層で、乾燥すると色味が暗くなり、遺構の平面形が不明確になりがちで、特に遺構検出には苦労した。

遺構は発見順に人力掘削を行い、適宜、土層観察用のベルトを残し、断面図等を記録した。遺構完掘後は、写真撮影とトータルステーションによる平面図作成を実施し、ほぼ全面にわたる調査が終了した後、ラジコンヘリによる空撮を実施した。今回の調査では、空撮実施後に遺構（5号住居）を検出したため、空撮全景写真には5号住居を入れることができなかつた。

調査記録

7月10日 重機による表土掘削開始

7月12日 遺構検出作業開始

7月16日 遺構掘削開始

7月30日 表土掘削終了

8月2日 1号住居遺物出土状況等撮影

8月9日 1・2号住居完掘

8月13日 36号溝から多量の土器群を検出

8月22日 36号溝を調査中に大型の壺を検出、土層断面から36号溝とは別遺構として調査（1号土坑）

- 8月29日 3・4号住居完掘
8月30日 36号溝完掘
8月31日 空撮
9月10日 調査区壁面のセクション図等を記録し、一旦調査を終了する
9月19日 空撮写真から5号住居の存在を確認したため、再度調査を開始する
9月26日 5号住居を完掘し、調査を終了する
- 【発掘作業参加者】（敬称略）
雨宮久美子・岩崎誠至・小澤美幸・櫛原織江・栗原礼子・齊藤里美・鮫田勝夫・菅沼芳治・田中悦子・土屋晴子・筒井聰・長澤晴雄・長田秋文・西室匠・萩原里江子・廣瀬さとり・廣瀬友子・正木なつ子・松本榮一・水上一実・三森豊子・望月明

第3節 整理作業の経過

現地調査終了後、平成25年度末までに、遺構図面の整理、写真整理、出土遺物の洗浄・注記・接合作業を行い、平成26年度に遺構図面のトレース、遺物の実測図及びトレース、遺物写真撮影、観察表の作成を行って、発掘調査報告書（本書）を作成した。また、平成26年3月～4月には山梨県埋蔵文化財センター主催『山梨の遺跡展2014』にて展示を行い、同年10月18日には山梨県埋蔵文化財センター内、風土記の丘研修センターにて開催された「平成26年度（上半期）遺跡調査発表会」（主催：山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会）において、調査内容の発表と遺物の展示を行った。

- 【整理作業参加者】（敬称略）
雨宮久美子・栗原礼子・土屋晴子・萩原里江子・正木なつ子・望月小枝



甲州市学校給食センター

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

甲州市（第1図）は平成17年に塩山市・勝沼町・大和村の3市町村が合併して誕生した市で、山梨県北東部、甲府盆地の東縁に位置する。市域は南北に長く、総面積は約264.01km²、人口は約3万3千人で、北は埼玉県秩父市、北東は山梨県丹波山村、小菅村、東は大月市、南西は笛吹市、北西は山梨市に接している。市域の大半は山地で、重川・日川等から形成された複合扇状地には市街地や果樹園が展開している。重川は市内北東に位置する大菩薩嶺（2057m）から発し、塩山市街地を南流し、笛吹市一町田中付近で笛吹川と合流する河川で、この流域に沿って遺跡も展開している。

熊野八反田遺跡は中央線JR塩山駅から南へ約2.6km、塩山熊野の鎮守である熊野神社から東へ約500mの地点に位置しており、重川右岸の扇状地上に立地する。

第2節 歴史的環境

熊野八反田遺跡が所在する熊野という地名は、大同2年（807）に紀伊から勧請した熊野社が鎮座することによると伝えられている。熊野神社の創祀は、国内に病気が流行して里人が困窮していた時、横井郷獅子見堀に白衣の老翁が現れて「紀伊国熊野權現の神使」と託宣したため、神靈を熊野から勧請したのが始まりとされ、古くは「横井」という地名だったことが見えるが、以後当地を熊野と改めたという。現在では熊野は大字、横井は小字として残っている。

中世に至ると、永禄年間（1558～1570）に武田信玄が前別当によって売却された社領の代わりに新たな地を寄進して、祭礼・祭祀の怠慢を禁じ、また、窪八幡、一宮などとともに府中八幡への禰宜の勤番を免除した。後には武田勝頼が「神田作人祭祀懈怠之事」など十か条の禁制を設け、武田氏滅亡後は、徳川家康が熊野・於曾・広門田・山・西原4村の産土神となり、熊野信仰に基づく著名な神社の一つとして信仰された。なお、熊野神社本殿2棟と棟札4枚および拝殿1棟は、昭和24年に国指定の重要文化財とされ、それぞれ昭和26・27年に解体修理が行われ、今日の姿となっている。指定対象となった本殿2棟は、構造手法から鎌倉時代の建立と考えられており、文保2年（1318）の代替のものと推定されている。また、拝殿は様式上から室町時代後期のものと推定されており、往時の姿をよく残している。

古代律令国家成立後、甲斐国には山梨郡・巨摩郡・八代郡・都留郡が置かれた。山梨郡の十郷は東西五郷に分かれ、そのうち東郡に於曾郷が含まれていたとされる。於曾郷の範囲は、現在の塩山市街地が相当すると考えられており、これに近接する熊野も於曾郷に属していたのではないかと考えられる。熊野を含む塩山市街地一帯は、塩川と重川に挟まれた地形にあり、遺跡の包蔵地となっているところも多く、過去、発掘調査が行われた地点も多い。以下、調査事例から当地の歴史的環境に触れていく（第3図・第1表）。

甲州市内の調査事例は、道路建設などの公共事業に伴う発掘調査のものが大半を占めている。古くは昭和50年代の塩山バイパス建設に伴って西田遺跡、町田遺跡などの調査が行われている。

西田遺跡（37）（数字は第3図・第1表の番号と対応する）は、塩山熊野に位置する古墳前期の集落遺跡で、

塩山バイパス建設に伴う調査（1次調査）、塩山警察署新築工事に伴う調査（2次調査）、店舗新設に伴う調査（3次調査）と3次にわたって発掘調査が行われている。1次調査では、〈縄文〉土坑2、〈弥生後期〉竪穴住居1、〈古墳前期〉竪穴住居7、方形周溝墓5、土坑2、溝状遺構5、〈奈良〉竪穴住居1、掘立柱建物1、〈時期不明〉溝状遺構2が検出されている。2次調査では、〈古墳前期〉竪穴住居54、溝状遺構6、土坑などが検出され、3次調査では、〈古墳前期〉竪穴住居4、〈中世〉掘立柱建物1、土坑6が検出されている。平安時代の遺構がみられないものの、縄文～中世にわたる遺跡であり、中でも数十軒規模の古墳前期住居跡からなる集落と、方形周溝墓などの墓域が両方検出されている点は注目される。

町田遺跡（58）は、塩山下於曾に位置する縄文時代の集落遺跡で、塩山バイパス建設に伴って調査が行われた。〈縄文〉竪穴住居8、溝、土坑などが検出されている。

少し時代が降って平成になると、塩山東バイパス建設に伴って、西畠遺跡（西畠B遺跡）、下西畠遺跡、影井遺跡、大木戸遺跡、五反田遺跡、獅子之前遺跡などの調査が行われた。

西畠遺跡（西畠B遺跡）（13）は、塩山赤尾に位置し、〈平安〉竪穴住居7、溝1、〈近世～近代〉道路遺構等が検出されている。

下西畠遺跡（14）は、塩山赤尾に位置し、〈縄文〉竪穴住居1、土坑4、〈古墳前期〉竪穴住居2、方形周溝墓4、〈奈良〉竪穴住居1、〈平安〉竪穴住居2が検出されている。

影井遺跡（19）は、塩山下於曾に位置し、〈平安〉竪穴住居3、〈平安～中世〉掘立柱建物などが検出されている。

大木戸遺跡（21）は、塩山下於曾に位置し、〈縄文時代〉竪穴住居14、土坑8、〈古墳前期〉溝1、〈平安〉竪穴住居20、土坑2、溝8、〈中世〉墓3などのほか、谷部から縄文～平安時代の遺物が検出されている。

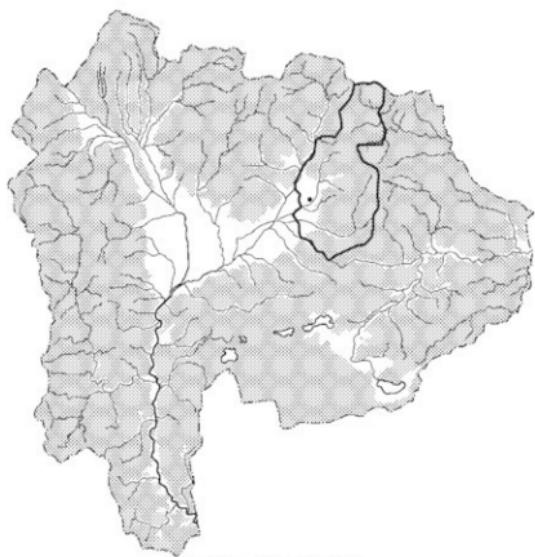
五反田遺跡（22）は、塩山熊野に位置する。東バイパス建設に伴う発掘調査では〈古墳前期〉竪穴住居6、竪穴状遺構3、〈平安〉竪穴住居11が検出されている。また、2013年にも大型店舗建設に伴った発掘調査が実施されており、奈良～平安時代の竪穴住居が70以上、溝12、土坑7、掘立柱建物2、河道1が検出され、大規模な集落であったことが判明している。

獅子之前遺跡（92）は塩山千野に位置し、〈縄文〉竪穴住居7、土坑、〈弥生〉土坑（墓？）、〈奈良・平安〉竪穴住居10、土坑、〈近世〉道路状遺構などが検出されている。

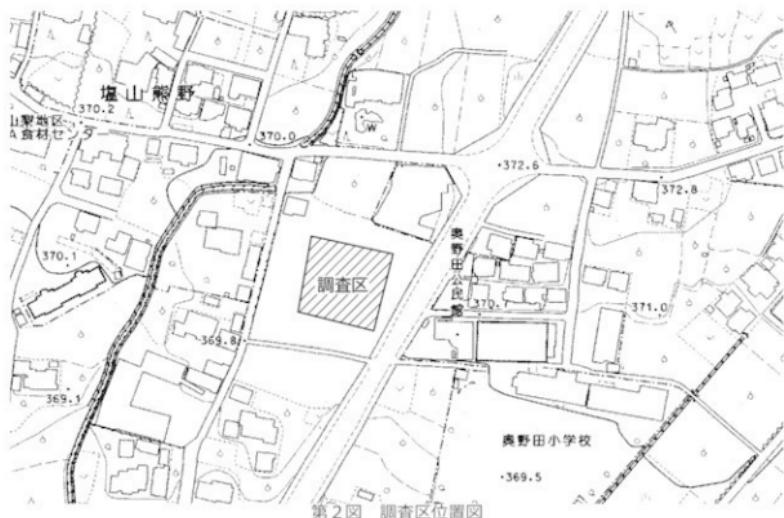
道路以外にも、県営熊野団地に伴い調査が行われた一ノ坪遺跡（43）は、塩山熊野に位置し、〈縄文〉竪穴住居2、土坑、〈平安〉竪穴住居5、土坑、竪穴状遺構3、溝5が検出されている。

近年では、塩山バイパスと塩山東バイパスとを結ぶ予定の市道下塩後22号線建設に伴って調査された梶畠B遺跡（45）がある。梶畠B遺跡は、塩山下於曾から熊野にかけて存在し、〈縄文前期〉竪穴住居1、屋外炉、土坑、〈古墳前期〉竪穴住居2、〈平安〉竪穴住居5、小穴多数。〈中世〉竪穴状遺構1が検出されている。

個人住宅建設に伴って調査された宇賀屋敷遺跡（1）は塩山下於曾に位置し、〈平安〉竪穴住居2、溝2、土坑3、竪穴状遺構3、〈中世〉溝2が検出されている。



第1図 甲州市の位置



第2図 調査区位置図



第3図 周辺の遺跡包藏地（★印は調査地点）

第1表 道跡包藏地一覧表

番号	道跡名	種別	所在地	時期
1	宇賀星敷道跡	集落跡	下於曾	奈良・平安・中世
2	宇賀星敷	城郭跡	下於曾	
3	赤田氏屋敷	城郭跡	下於曾	中世
4	賀田天神社道跡	敷布地	上於曾	縄文
5	於曾屋敷	城郭跡	下於曾	
6	於曾屋敷道跡	敷布地	下於曾	平安・中世
7	鐵板道跡	敷布地	下於曾	中世
8	神之木道跡	敷布地	下於曾	縄文・古墳・平安
9	大和道跡	敷布地	下於曾	縄文・平安・中世
10	大和道跡	敷布地	下於曾	縄文・平安
11	西原A道跡	敷布地	赤原	平安・中世
12	保坂氏屋敷	城郭跡	赤原	
13	西原B道跡	敷布地	赤原	縄文・中世
14	下西原道跡	敷布地	赤原	縄文・弥生・古墳
15	八代氏屋敷	城郭跡	赤原	
16	吉原道跡	敷布地	赤原	縄文・古墳・平安
17	久保田道跡	敷布地	赤原・下於曾	平安
18	精強道跡	敷布地	赤原	中世
19	影井道跡	敷布地	下於曾	縄文・平安
20	浦田道跡	敷布地	赤原	中世
21	石原・大戸田道跡	敷布地	赤原・下於曾	平安
22	石原田道跡	敷布地	赤野	古墳
23	石原台道跡	敷布地	赤野	
24	石曾A道跡	敷布地	赤野	縄文・平安
25	馬野八反田道跡	敷布地	赤野	平安
26	下野田道跡	敷布地	赤野	縄文
27	毛ヶ上道跡	敷布地	西野原	
28	西ノ原の集	城郭跡	西野原	中世
29	坂之下・后郷道跡	敷布地	赤野	平安
30	ヶ子A道跡	敷布地	赤野	古墳・平安
31	三山理	塚	赤野	
32	依田丘内左衛門屋敷	城郭跡	赤野	中世
33	依田丘内右衛門屋敷	城郭跡	赤野	中世
34	前野前田道跡	敷布地	赤野	平安
35	中道道跡	敷布地	赤野	平安
36	前野神社道跡	敷布地	赤野	古墳・古墳
37	赤田道跡	集落跡	赤野・西広門田	縄文・奈良
38	東田道跡	集落跡	西広門田	縄文・古墳
39	南原道跡	敷布地	西広門田	縄文・古墳
40	西亞道跡	敷布地	西広門田	平安
41	佐藤木平道跡	敷布地	下塙後	平安
42	村北道跡	敷布地	西広門田	奈良・平安
43	村北道跡	敷布地	赤野	縄文・奈良・平安
44	松坂A道跡	敷布地	赤野	平安
45	松坂B道跡	集落跡	下於曾・赤野	平安・古墳・平安
46	下於曾八反田道跡	敷布地	下於曾	平安
47	鹿原長屋敷	城郭跡	下於曾	
48	正常A道跡	敷布地	下於曾	古墳・平安
49	正常B道跡	敷布地	下於曾	平安
50	中村氏屋敷	城郭跡	下於曾	
51	松道跡	敷布地	下於曾	縄文
52	受地道跡	敷布地	下於曾	平安
53	依田丘内左衛門屋敷	城郭跡	下於曾	中世
54	田川氏屋敷	城郭跡	下於曾	中世
55	向原道跡	敷布地	下塙後・西広門田	奈良・平安
56	扇原道跡	敷布地	下於曾・赤野・門田	奈良・平安
57	扇田A道跡	敷布地	下於曾	縄文
58	町田道跡	集落跡	下於曾	縄文
59	扇田C道跡	敷布地	下於曾・西広門田	縄文・奈良・平安
60	十王C道跡	敷布地	下於曾	平安
61	髪切塚	塚	下塙後	中世・近世
62	菜師平道跡	敷布地	下塙後	
63	清水田道跡	敷布地	下於曾	奈良・平安
64	道置道跡	敷布地	下於曾	弥生・古墳
65	知光院道跡	敷布地	下塙後・下塙後	
66	千手院道跡	敷布地	下塙後	
67	おせん利成塚	塚	下塙後	
68	扇谷林道跡	敷布地	下塙後	
69	おまと・扇谷塚	塚	下塙後	
70	宮之前道跡	敷布地	上塙後	
71	清水川底道跡	敷布地	上塙後	縄文・古墳・平安
72	鈴の灰塚	塚	上塙後	
73	千手院道跡	敷布地	上塙後	縄文
74	高林道跡	敷布地	上塙後	縄文・中世
75	坂山前道跡	敷布地	上塙後	縄文
76	東山道跡	敷布地	上野原	平安・中世・近世
77	東大丸道跡	敷布地	上野原	
78	大曾根大支塚	扶手塚	上野原	近世
79	扇谷寺の塚	寺古跡	上於曾	近世
80	腰掛道跡	敷布地	三日市場	縄文・近世
81	腰掛道跡	敷布地	三日市場	
82	中野道跡	敷布地	三日市場	縄文・平安
83	青田道跡	敷布地	千野	縄文・平安
84	青田A道跡	敷布地	千野	平安
85	村田氏屋敷	城郭跡	千野	中世
86	八葵田西道跡	敷布地	千野	縄文・平安
87	札之内・見A道跡	敷布地	千野	平安
88	札之内・見B道跡	敷布地	千野	平安
89	筑前草道跡	敷布地	千野	縄文・平安
90	筑前草道跡	敷布地	千野	縄文・平安
91	小山平舟道跡	敷布地	千野	中世
92	鶴子之介道跡	集落跡	千野	縄文・平安・弥生・平安
93	古屋清方衛門屋敷	城郭跡	千野	縄文
94	梅木道跡	敷布地	上於曾	平安
95	梅木大木塚	塚	上於曾	
96	お丈株井荷塚	塚	上於曾	
97	櫻爪氏屋敷	城郭跡	上於曾	
98	於曾二郎屋敷	城郭跡	上於曾	
99	相川田道跡	敷布地	赤原	縄文・古墳・平安
100	赤原通口道跡	敷布地	赤原	近代
101	赤原通口道跡	敷布地	赤原・生野	縄文
102	赤在家道跡	敷布地	下野牛野	縄文・平安
103	牛久保道跡	敷布地	下野牛野	縄文・平安
104	平塚	城郭跡	下野牛野	
105	南御道跡	敷布地	下野牛野	弥生

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査は重機による表土掘削の後、発掘作業員の人力によって遺構検出作業を実施した。表土掘削は調査区の北東隅から始め、北側、南側と順次掘削を行ったが、遺構確認面までの深さが約1.1～1.2mあったために、南西隅まで掘削するのに約20日間を要した。

遺構は検出した後、土層観察用のベルトを残して掘削を行い、出土遺物は微小なものは一括として取り上げ、そうでないものはトータルステーションで、原位置の記録と遺物取り上げ番号を付して回収した。回収した遺物は市販のチャック付ビニール袋に納め、袋に遺構名や番号を記載して保管した。土層断面図は、水糸を設定して対象を測り、方眼紙図面に記録したが、単一層と判断した遺構については、上質の記録等に留めた。遺構平面図は、トータルステーションと遺構遺物実測システム（「遺構くん」）を用いて測量し、それを元に作図を行った。空撮はラジコンヘリを飛ばして撮影を実施し、写真測量により全体図を作成した。

第2節 層序

層序は、調査区東側中央部分で地表下約1.8mまで深掘りした地点を参考とすると、1層：暗灰色土層、2層：暗黃灰色土層、3層：暗灰色土層、4層：黒褐色土層、5層：明黄灰色土層、6層：暗灰色土層、7層：灰褐色砂質土層（しまり強い）、8層：黒褐色土層となっており、層厚は1層：約20cm、2層：約25～30cm、3層：約10cm、4層：約15cm、5層：約10～15cm、6層：約15cm、7層：約60～70cm、8層：15cm以上である。1層は表土、2層は旧地表面で、3・4・6層は包含層で、5層は砂粒を多量に含んだ層であり、洪水等の影響を受けていることが推定される。地表下約90cm、7層上面で1号住居を確認したことから、この面で遺構検出作業を行い、調査を行った。

なお、調査区南西隅では、1層：茶褐色砂礫層、2層：暗黃灰色土層、3層：黄灰色砂質土層、4層：暗灰色土層、5層：明灰色砂質土層、6層：暗灰色土層、7層：灰褐色砂質土層、8層：黒褐色土層、9層：灰褐色砂質土層（しまり強い）となっており、層厚は1層：約45cm、2層：約15～20cm、3層：約15～20cm、4層：約15cm、5層：約5～10cm、6層：約10～15cm、7層：約15～20cm、8層：約25cmで、9層は上面のみの検出のため厚さは不明である。1層は表土、2層は旧地表面であるが、東側に比べて西側の方が旧地表面が低くなっている。4層・6層は包含層であるが、中間の5層は砂層となっており、東側と同様に洪水の影響を示唆するものである。東側の7層とよく似た7層上面で遺構検出作業を行ったが、成果は芳しくなかった。そこで、部分的に露出していた遺構と7層とを精査した結果、7層の下の土層が遺構の覆土（8層：36号溝）であることが判明したため、7層を人力で除去し、36号溝を検出した。このため、西側では8層上面が遺構確認面となる。そして、36号溝の底面で確認された9層が東側の7層に対応する土層と考えられる。

以上から調査区全体を概観すると、北東隅が最も高く、南西隅が最も低い微傾斜地となっていることがわかる。

第3節 遺構

ほぼ正方形を呈した 1600m² (40 × 40m) の調査区内において、発見された遺構は、竪穴住居跡 5 軒、溝跡 58 本、土坑 1 基、ピット（小穴）41 基である（第4～11図）。調査区の北側に小規模な溝跡群が集中しており、調査区中央から南側にかけて竪穴住居が展開し、調査区西側には流路とみられる溝跡、西側中央から南西隅にかけて、大量の土師器が検出された大型の溝跡が存在する遺構配置となっている。

（1）竪穴住居跡

1号住居（第6・7・9・12～14図、第24・25図、第3表、写真図版1～3）

調査区中央からやや東寄りの X-34240、Y20800 付近に位置する。約 6.7 × 5.6m の規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸方向は N-19°-W。深さは遺構確認面から約 15cm を測り、床面は平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は概して上下 2 層に分かれ、下層では炭化物が多く含まれており、焼失住居と考えられる。遺物も土師器を主体として多量に検出されているが、炭化物が堆積する土層の上からの検出が多く、住居が焼失して倒壊したあとに投げ込まれたものが主であると考えられる。住居内ピットは 9 基で、炉は地床炉で、住居中央から南寄りに位置する。

遺物は、S 字状口縁台付甕、壺、鉢、有孔鉢、小型丸底鉢、高环、器台、ミニチュア土器等の土師器で、住居中央から南側にかけて特に集中しており、個体に復元できる資料も多い。

2号住居（第8・15図、第26図、写真図版4）

調査区の北西側、X-34225、Y20780 付近に位置する。31・34 号溝に切られ、1・35 号溝を切る。約 4.4 × 3.6m の規模で、平面形は長方形を呈する。主軸方向は N-10°-W。柱穴や炉などの施設検出されておらず住居として機能していたか疑問が残る。後には流路（34 号溝）等の浸食もあったことから、選地上問題があったとも考えられる。遺物は台付甕や炭化物が出土している。

3号住居（第7・8・10・16・17図、第26図、第3表、写真図版4・5）

調査区中央、X-34235、Y20785 付近に位置する。西側に隣接する 4 号住居を切って構築される。約 6.7 × 7.1m の規模で、平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向は N-21°-W。深さは遺構確認面から約 45cm を測り、床面は平坦であるが東側がやや高く、壁面はゆるやかに立ち上がる。住居の北・東・南壁に沿って周溝がめぐり、住居内ピットは 7 基、炉は地床炉で住居中央からやや北寄りに位置する。炉には枕石と台付甕の脚部が残存していた。

遺物は、台付甕、甕、壺、鉢、小型丸底鉢、高环等の土師器で、床面付近から出土している。

4号住居（第10・16・17図、写真図版4・5）

調査区中央、X-34235～34240、Y20780 付近に位置する。東側に隣接する 3 号住居に切られるため、全体の規模や平面形は不明であるが、約 5.5 × 残存長 2.6m 以上の規模で、平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸方向は N-13°-W。深さは遺構確認面から約 30cm を測る。床面はやや凹凸があり、東側がやや高く、壁面はゆるやかに立ち上がる。柱穴や炉などの施設は検出されていない。

遺物は、甕、壺、小型丸底鉢等の小破片が出土している。

5号住居（第9・17・18図、第27図、第3表、写真図版6・7）

調査区南東、X-34250、Y20800 付近に位置する。西側の一部を搅乱によって失っているが、約 7.9 × 7.3m の規模で、平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向は N-23°-W。深さは遺構確認面から約 30～40cm を測

り、床面は平坦で、壁面はやや急に立ち上がる。住居の東・西壁に沿って周溝がめぐっており、住居内ピットは4基、炉は地床炉で住居中央からやや西寄りに位置しており、炉には枕石が残存していた。

遺物は、台付甕、壺、鉢、有孔鉢、高环、小型丸底鉢等の土師器で、住居南西隅床面付近に集中する傾向がみられた。

(2) 溝跡

1号溝（第6～8・19図、第27図、写真図版7）

調査区の北側を東西方向に走る溝で、X-34230、Y20805付近と東端とし、西端は調査区外に延びる。長さ約36.3m、幅約40～200cm、深さ約20～40cmを測る。直線的な溝であるが、X-34225、Y20785付近でわずかに屈曲している。2号住居、31・34号溝、19ピットに切られ、2・3・4・12・15号溝を切る。北側の小規模溝群と南側の住居群との間に位置することから、区画を意図した溝と考えられる。

遺物は甕、壺、高环ないし器台の土師器が出土しており、摩耗しているものもみられる。

31号溝（第7・8・20図、写真図版9）

調査区北西、X-34220、Y20785付近に位置する溝で、47号溝に切られ、2号住居を切る。長さ9.66m、幅約65～92cm、深さ約10cmを測る。底面は凹凸が多い。

33号溝（第8図、写真図版9）

調査区西側、X-34225、Y20770付近に位置し、搅乱に切られ、1号溝を切る。西側は調査区外に延びる。残存長約2.42m、幅約49cm、深さ約24cmを測る。覆土は明灰色砂で、流路跡と考えられる。遺物は甕、壺等の土師器小片が出土している。

34号溝（第8図、写真図版9）

調査区北西、X-34225、Y20780からX-34230、Y20770付近にかけて位置し、2号住居、36・37号溝を切り、搅乱に切られる。西側は調査区外に延びる。覆土に砂粒を多量に含み、底面は浸食による凹凸が著しいことから、流路跡と考えられる。長さ約12m、幅約25～70cm、深さ約10～40cmと一定しない。遺物は甕、壺、小型丸底鉢等の土師器小片が出土している。

35号溝（第7・8・19図、写真図版9）

調査区北西、X-34230、Y20785付近に位置し、2号住居に切られる。残存長約8.43m、幅約36～84cm、深さ約20cmを測る。

36号溝（第11・20～23図、第27～30図、写真図版10～12）

調査区南西、北端はX-34230、Y20770付近から、調査区南西隅X-34250、Y20765にかけて走る大型の溝で、34・37号溝、1号土坑、27・43ピットに切られる。やや蛇行した平面形で、調査区内で確認された規模は、長さ約19.22m以上、幅約6.8m以上、深さ約60cmを測る。覆土に小礫、酸化鉄を含んでおり、下層で顕著になることから、流路として機能していた溝と考えられる。底面はやや凹凸があり、壁面は非常に緩やかに立ち上がる。遺物は台付甕、甕、壺、鉢、有孔鉢、小型丸底鉢、高环、器台等の土師器が出土している。

37号溝（第8図）

調査区西側、X-34230、Y20770付近に位置し、34号溝に切られ、36号溝を切る。残存長約3.21m、幅約31～35cm、深さ約5cmを測る。覆土は灰褐色砂質土。

38号溝（第7図）

調査区中央、X-34230、Y20790 付近に位置し、1号溝、3号住居を切る。長さ約 8.94m、幅約 21～34cm、深さ約 2cm を測る。遺物は甕、壺等の土師器小片が出土している。覆土は灰褐色砂質土。

39号溝（第8図）

調査区北西、X-34215、Y20775 付近に位置する。長さ約 2.05m、幅約 35～61cm、深さ約 10cm を測る。覆土は黒褐色土で灰褐色砂質土がブロック状に含まれている。

40号溝（第8図、写真図版 12）

調査区北西、X-34215、Y20775 から X-34225、Y20775 付近にかけて位置し、1号溝、搅乱に切られる。残存長約 12.21m、幅約 32～40cm、深さ約 10cm を測る。覆土は暗褐色土。

51号溝（第7図）

調査区中央、X-34235、Y20795 付近に位置する。長さ約 7.43m、幅約 28～38cm、深さ約 5cm を測る。底面の凹凸が著しく、水による浸食の影響が考えられる。覆土は灰褐色砂質土。遺物は甕等の土師器小片が出土している。

52号溝（第8図、第30図）

調査区西側、X-34230、Y20770 付近に位置し、西側は調査区外に延びる。長さ約 2.86m、幅約 69～77cm、深さ約 10cm を測る。覆土は 34号溝と似た砂地で、流路と考えられる。遺物は台付甕、甕、壺、环、高坏ないし器台等の土師器小片が出土している。

53号溝（第10・20図、第30図）

調査区南側、X-34250、Y20785 付近に位置する。長さ約 10.07m、幅約 78～109cm、深さ約 17cm を測る。覆土は灰褐色砂質土で、灰白色の砂粒を少量含んでいる。遺物は台付甕、甕、壺、鉢等の土師器が出土している。

54号溝（第11図）

調査区南西、X-34245、Y20775 付近に位置する。やや弧状を呈する平面形で、長さ約 7.14m、幅約 22～36cm、深さ約 10cm を測る。覆土は黒褐色土。遺物は甕、小型丸底鉢、高坏ないし器台等の土師器小片が出土している。

55号溝（第11図）

調査区南西、X-34245、Y20780 付近に位置する。長さ約 4.67m、幅約 26～39cm、深さ約 10cm を測る。覆土は黒褐色土。

56号溝（第11図）

調査区南西、X-34245、Y20780 付近に位置し、搅乱に切られる。残存長約 2.84m、幅約 17cm、深さ約 10cm を測る。覆土は黒褐色土。

並行溝群（2～30、32、41～50号溝）（第6・7図）

調査区の北側に展開する溝群で、一定の間隔をあけて 20 本以上の溝が並行する。断面はいずれも U 字形を呈する。溝群の東半（24号溝以東）は重複が多く、並行する溝群が互いに直行し合って存在しているが、覆土はいずれも暗灰色土で差異がほとんどなく、相互の新旧関係を明らかできないものも多かった。溝群の西半（30号溝以西）は重複は少なく、平面形が直線的な溝と弧状の溝とが存在する。これらは一定の間隔で並行関係にあり、弧状の溝に隣接して弧状の溝が配されていることから、これらは互いに関係して成

立する溝群であると考えられる。

2号溝（第6図）

X-34230、Y20800付近に位置し、1号溝に切られ、17号溝を切る。残存長約1.41m、幅約19cm、深さ約10cmを測る。

3号溝（第6図）

X-34230、Y20800付近に位置し、1・15号溝に切られ、16号溝を切る。また、17号溝と重複関係にある。残存長約2.2m、幅約30～35cm、深さ約8cmを測る。

4号溝（第6図）

X-34230、Y20800付近に位置し、1号溝に切られる。また、15～17号溝と重複関係にある。残存長約2.7m、幅約18～25cm、深さ約13cmを測る。

5号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、4・19号溝と重複関係にある。残存長約1.97m、幅約17～19cm、深さ約12cmを測る。

6号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、21号溝に切られる。また、15～17・19号溝と重複関係にある。残存長約4.7m、幅約24～35cm、深さ約12cmを測る。遺物は甕、壺等の土師器小片が出土している。

7号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、19・20号溝に切られる。残存長約65cm、幅約13cm、深さ約20cmを測る。

8号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、17号溝に切られ、16号溝を切る。また、9号溝と重複関係にある。残存長約1.3m、幅約28～31cm、深さ約16cmを測る。

9号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、17号溝に切られ、18号溝を切る。また、8号溝と重複関係にある。残存長約1.31m、幅約15～19cm、深さ約10cmを測る。

10号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、20号溝に切られ、19号溝と重複関係にある。残存長約1.67m、幅約27～38cm、深さ約10cmを測る。

11号溝（第6図）

X-34225、Y20805付近に位置し、13ピットに切られ、15号溝と重複関係にある。残存長約1.82m、幅約18～30cm、深さ約7cmを測る。

12号溝（第6図）

X-34230、Y20805付近に位置し、1号溝に切られる。残存長約2.22m、幅約33～39cm、深さ約12cmを測る。

13号溝（第6図）

X-34225、Y20805付近に位置し、15号溝に切られる。残存長約1.76m、幅約17～24cm、深さ約11cmを測る。

14号溝（第6図）

X-34220、Y20805付近に位置し、20ピットに切られる。残存長約1.67m、幅約21cm、深さ約13cmを測る。

15号溝（第6図）

X-34225、Y20805付近から、X-34230、Y20800付近にかけて位置し、1号溝に切られ、13号溝を切る。また、4・6・8・11号溝と重複関係にある。やや蛇行するが、残存長約6.81m、幅約21～33cm、深さ約15cmを測る。遺物は壺等の土師器小片が出土している。

16号溝（第6図）

X-34230、Y20800付近に位置し、3・8号溝に切られる。また、4・6号溝と重複関係にある。残存長約2.42m、幅約24～33cm、深さ約13cmを測る。

17号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、2号溝、13ピットに切られ、8・9号溝を切る。また、3・4・6号溝と重複関係にある。残存長約4.15m、幅約18～25cm、深さ約7cmを測る。

18号溝（第6図）

X-34225、Y20805付近に位置し、9号溝、13ピットに切られる。残存長2.35m、幅約20～25cm、深さ約16cmを測る。

19号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、7・57号溝を切る。また、5・6・10号溝と重複関係にある。残存長約6.16m、幅約18～27cm、深さ約20cmを測る。

20号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、7・10号溝を切る。また、57号溝と重複関係にある。残存長約1.69m、幅約33cm、深さ約12cmを測る。遺物は壺等の土師器小片が出土している。

21号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、6・28・57号溝を切る。やや蛇行するが、残存長約5.59m、幅約39～52cm、深さ約17cmを測る。

22号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、28号溝、14ピットに切られ、27号溝を切る。残存長約2.76m、幅約20～28cm、深さ約10cmを測る。

23号溝（第6・7図）

X-34220、Y20800付近に位置し、26号溝を切る。また、27～29号溝と重複関係にある。若干弧状の平面形で、残存長約9.4m、幅約18～28cm、深さ約10cmを測る。遺物は土師器の小片が出土している。

24号溝（第6・7図）

X-34220、Y20800付近に位置し、北側は調査区外に延び、25号溝を切る。また、27～29号溝と重複関係にある。残存長約8.48m、幅約18～35cm、深さ約10cmを測る。

25号溝（第6図）

X-34220、Y20800付近に位置し、24号溝に切られる。また、28・29号溝と重複関係にある。長さ約2.52m、幅約23cm、深さ約11cmを測る。

26号溝（第6図）

X-34225、Y20800付近に位置し、23号溝、14ピットに切られる。残存長約1.12m、幅約20cm、深さ約12cmを測る。

27号溝（第6図）

X-34220、Y20800付近に位置し、22号溝に切られる。また、23・24号溝と重複関係にある。残存長約3.15m、幅約20～31cm、深さ約11cmを測る。

28号溝（第6図）

X-34220、Y20800付近に位置し、21号溝に切られ、58号溝を切る。また、23～25号溝と重複関係にある。残存長約4.86m、幅約23～35cm、深さ約10cmを測る。

29号溝

X-34220、Y20800付近に位置し、58号溝に切られる。また、23～25号溝と重複関係にある。残存長約2.87m、幅約25cm、深さ約10cmを測る。

30号溝（第7図）

X-34225、Y20795付近に位置し、15ピットを切る。長さ約3.01m、幅約19～26cm、深さ約12cmを測る。

32号溝（第7図）

X-34220、Y20795付近に位置し、28ピットに切られる。長さ約7.82m、幅約16～27cm、深さ約8cmを測る。

41号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置する。やや弧状の平面形で、長さ約7.73m、幅約24～32cm、深さ約9cmを測る。遺物は甕等の土師器小片が出土している。

42号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置する。やや弧状の平面形で、長さ約3.79m、幅約19～28cm、深さ約13cmを測る。

43号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置する。長さ約1.38m、幅約29cm、深さ約11cmを測る。

44号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置する。やや弧状の平面形で、長さ約4.07m、幅約20～28cm、深さ約14cmを測る。遺物は甕等の土師器小片が出土している。

45号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置する。長さ約2.16m、幅約20cm、深さ約8cmを測る。

46号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置する。やや弧状の平面形で、長さ約2.48m、幅約21～25cm、深さ約5cmを測る。

47号溝（第7図）

X-34220、Y20790付近に位置し、31号溝を切る。長さ約2.87m、幅約25cm、深さ約10cmを測る。

48号溝（第7図）

X-34215、Y20790付近に位置し、北側は調査区外に延びる。長さ約3.97m以上、幅約16～23cm、

深さ約 14cm を測る。

49号溝（第7図）

X-34225、Y20785 付近に位置し、50号溝を切る。長さ約 2.69m、幅約 23～31cm、深さ約 12cm を測る。

50号溝（第7図）

X-34225、Y20785 付近に位置し、49号溝に切られる。残存長約 1.05m、幅約 20cm、深さ約 9cm を測る。

57号溝（第6図）

X-34225、Y20805 付近に位置し、19・21号溝に切られる。また、20号溝と重複関係にある。残存長約 1.24m、幅約 37cm、深さ約 15cm を測る。

58号溝（第6図）

X-34220、Y20800 付近に位置し、28号溝に切られ、29号溝を切る。残存長約 1.57m、幅約 25cm、深さ約 10cm を測る。

(3) 土坑

1号土坑（第11・20図）

調査区南西、X-34245、Y20770 付近に位置し、36号溝と重複する。36号溝の調査中に大型の壺を検出し、念のため断ち割って断面を確認してみたところ、壺は 36号溝底面を掘りこんで正位に置かれたものであることが判明した。埋置された壺は土圧による破損があったものの、ほぼ完形を保っており、この点から 1号土坑が 36号溝より新しく判断した。土坑の平面形は正円で、直径約 60cm、深さは 36号溝上面から約 47cm、36号溝底面から約 30cm を測り、壺より一回り大きい程度の規模となっている。覆土の特徴に 36号溝と大きな差異はなく、相互の時期差は小さいと考えられる。36号溝が完全に埋没する前に壺が据え置かれたものだとすれば、ちょうど壺の肩部から上にあたる部分が溝の中で露出していたことになり、そうした埋置の仕方をあえて行っていた可能性もある。

(4) ピット (第6~11図、第2表)

ピットは41基確認されており、そのうち調査区北西隅に位置する22~25ピット(第8図、写真図版12)は等間隔の配置で、掘立柱建物の一部である可能性がある。

第2表 ピット一覧表

ピット番号	位置(クリッド)		法量(cm)			平面形	覆土	備考
	X	Y	長軸	短軸	深さ			
1	-34220	20810	114	88	13	楕円形	暗灰色土	縄文土器小片出土
2	-34220	20810	83	67	10	楕円形	暗灰色土	
3	-34220	20805	132	103	8	楕円形	暗灰色土	土師器小片出土
4	-34220	20805	165	96	7	楕円形	暗灰色土	
5	-34225	20805	89	46	11	楕円形	暗褐色土	
6	-34230	20810	154	(67)	7	楕円形	暗褐色土	ピットに切られる
7	-34230	20810	91	73	17	楕円形	暗褐色土	6・8ピットを切る
8	-34230	20810	90	82	7	円形	黒褐色土	7ピットに切られる
9	-34230	20805	55	48	18	円形	黒褐色土	
10	-34230	20805	53	42	15	円形	黒褐色土	
11	-34235	20805	60	50	16	円形	黒褐色土	
12	-34220	20810	61	52	20	円形	黒褐色土	
13	-34225	20800	148	124	16	不整楕円形	暗灰色土	11・17・18ピットを切る 甕等の土師器小片が出土
14	-34220	20795	71	68	18	円形	暗灰色土	22・26ピットを切る
15	-34220	20790	64	(33)	10	-	暗灰色土	
16	-34220	20790	52	49	14	円形	黒褐色土	
17	-34215	20790	37	35	8	円形	暗褐色土	
18	-34215	20790	46	38	10	円形	黒褐色土 硫少	
19	-34225	20785	157	106	10	楕円形	暗灰色土 炭化物少	1号溝を切る
20	-34215	20800	125	100	15	不整楕円形	暗灰色土 炭化物少	14号溝を切る
21	-34215	20775	79	76	14	円形	暗灰色土	
22	-34215	20775	58	50	20	円形	暗灰色土 炭化物微	掘立柱建物か
23	-34210	20770	53	49	21	円形	暗灰色土	掘立柱建物か
24	-34215	20770	58	54	30	円形	暗灰色土	掘立柱建物か
25	-34215	20770	52	51	37	円形	暗灰色土	掘立柱建物か
26	-34225	20785	94	(39)	20	-	暗褐色土	1号溝に切られる 36号溝を切る
27	-34230	20770	93	72	22	楕円形	暗灰色土	甕等の土師器小片が出土 36号溝を切る 台付 甕、壺、壺、高坏ない し器台等の土師器小 片が出土
28	-34215	20795	186	141	11	不整楕円形	暗灰色土	32号溝を切る
29	-34215	20775	34	31	6	円形	暗褐色土	
30	-34220	20770	52	46	7	円形	暗褐色土	
31	-34220	20770	115	29	10	不整楕円形	褐灰色土	調査区外に延びる 甕等の土師器小片が出土
32	-34220	20770	154	56	8	不整楕円形	暗褐色土	調査区外に延びる
33	-34240	20775	53	45	10	円形	暗灰色土 酸化鉄・砂粒	土師器小片出土
34	-34235	20785	48	36	11	楕円形	暗褐色土	
35	-34230	20785	85	70	18	楕円形	暗褐色土	
36	-	-	-	-	-	-	-	欠番
37	-34250	20800	70	67	11	円形	黒褐色土 酸化鉄少	
38	-34255	20800	75	60	16	楕円形	黒褐色土 酸化鉄少	
39	-	-	-	-	-	-	-	欠番
40	-34245	20770	103	73	21	円形	褐灰色土 酸化鉄少	
41	-34245	20770	81	65	7	楕円形	褐灰色土 酸化鉄少	搅乱に切られる
42	-34245	20780	66	61	35	不整円形	黒褐色土 酸化鉄少	53号溝を切る
43	-34245	20770	81	80	15	不整円形	黒褐色土	36号溝を切る

第3表 住居内ピット一覧表

ピット番号	位置(グリッド)		法量(cm)			平面形	覆土	備考
	X	Y	長軸	短軸	深さ			
1住-1	-34235	20800	83	62	13	楕円形	暗灰色土 砂粒微量	
1住-2	-34235	20795	57	56	38	円形	灰褐色土	
1住-3	-34240	20795	123	78	37	楕円形	暗灰色土 炭化物微量	
1住-4	-34235	20795	45	41	17	円形	暗灰色土	
1住-5	-34230	20795	60	50	15	不整円形	暗灰色土	
1住-6	-34230	20795	78	68	9	楕円形	黒褐色土	
1住-7	-34235	20795	38	30	18	円形	褐灰色土	
1住-8	-34235	20800	68	44	13	楕円形	黒褐色土	
1住-9	-34235	20795	69	61	31	不整円形	暗灰色土	
3住-1	-34230	20785	72	72	20	円形	暗灰色土 酸化鉄少量	土師器小片出土
3住-2	-34230	20780	58	46	42	楕円形	暗灰色土 酸化鉄少量	
3住-3	-34235	20785	73	64	33	楕円形	暗灰色土 砂粒少量	
3住-4	-34235	20785	60	52	23	楕円形	暗灰色土 砂粒少量	
3住-5	-34230	20785	88	54	37	楕円形	暗灰色土	
3住-6	-34235	20785	60	51	30	楕円形	黒褐色土	
3住-7	-34235	20785	34	33	40	円形	黒褐色土	
5住-1	-34250	20800	71	67	40	不整円形	暗灰色土 砂粒・酸化鉄微量	
5住-2	-34245	20795	128	45	20	楕円形	暗灰色土 砂粒・酸化鉄微量	
5住-3	-34250	20800	39	34	19	不整円形	暗灰色土 砂粒・酸化鉄微量	
5住-4	-34245	20795	33	25	16	楕円形	暗灰色土 砂粒・酸化鉄微量	

第4節 遺物

今回の調査で熊野八反田遺跡から出土した遺物は、コンテナ(60×40×20cm)15箱分に及ぶ。これらの遺物は、発掘調査終了後、洗浄・注記・接合を行い、報告書には一定の復元が可能で、状態が良好と判断される112点を掲載(第24~32図・第4表、写真図版14~24)した。

1号住居からは33点を掲載(第24図1~26、第25図1~7、第4表、写真図版14~17)した。

第24図1~4は高環で、1・2・4は楕形、3は有段形。5・6は器台で、6は明瞭な段を有し、口縁が外反する。7・8はミニチュア土器で、7は住居内1ピットから出土した完形品で、壺のミニチュア土器と考えられ、地鎮等の祭祀関連遺物であったものか。8は鉢のミニチュア土器。9は小型丸底鉢。10・11は有孔鉢で二次焼成を受け、土器表面がザラザラしており、11は折り返し口縁。12・13は鉢。14・16・17は壺で、14・16はハケメの上から一部ミガキ調整を行っている。15は、丸底浅鉢で、口縁部の形状と器壁の薄さがS字状口縁台付壺(以下「S字壺」)の特徴に共通する。第24図18~26および第25図1~5はS字壺で、いずれも肩部のハケメが横走しないS字壺D類と呼ばれる一群である。第25図6・7は口縁が「く」の字状に外反するく字状口縁台付壺(以下「く字壺」)で、6はハケメ調整、7はヘラケズリ調整の壺である。7は全体的に細かいゆがみがあり、やや粗い作りにみえる。

2号住居は遺物が少なく、台付壺の台部1点のみの掲載(第26図1、第4表、写真図版17)となった。台部の端部に折り返しがある。

3号住居からは17点を掲載(第26図2~18、第4表、写真図版17~18)した。

第26図2~4は小型丸底鉢で、ミガキ調整。4はミガキ調整の下にハケメ調整が残り、内・外ともに赤彩が施されている。5は壺、口縁部のみであるが、ハケメ調整で台付壺の可能性もある。6は直口壺の口縁部で赤彩が施されている。7・8は高環、环部は楕形で、透孔は3、大きくラッパ状に広がる脚部である。9はやや小振りなく字壺、10~14は台付壺の台部で、14のみ台端部を折り返しており、10~13

に比べてやや大振りである。15・17・18は壺で、ハケメ調整後にミガキ調整を施している。16は小型の壺で、全体にハケメを施す。胴部下半ではハケメは明瞭であるが、胴部上半ではナデが施されており、下半ほど明瞭ではない。頸部の輪積痕は装飾の一種と考えられる。口縁部から肩部にかけて、吹きこぼれのような煤の付着がみられる。

5号住居からは5点掲載（第27図1～5、第4表、写真図版18）した。

第27図1は小型丸底鉢で、内面のミガキが明瞭に残る。2は高环の环部、やや大振りだが、胎土や色調の特徴が他の高环と共通するため、高环と判断した。3は有孔鉢で、口縁端部を折り返している。4は壺で、ハケメ調整後、ミガキを施す。5は底部しか残存していないため全体の形状は不明だが残存部分では、底部は鍋底上で、緩やかではあるが底面から3cmほど垂直に立ち上がり、そこから外反する形状で、便宜上「鉢」とした。底面は少し四凸があり、内・外ともにミガキが施されている。

1号溝からは3点掲載（第27図6～8、第4表、写真図版19）した。

第27図6～8は壺で、6・8はミガキ調整、7はヘラケズリで仕上げている。

36号溝からは46点掲載（第27図9～23、第28図1～15、第29図1～9、第30図1～7、第4表、写真図版19～24）した。

第27図9・10は小型丸底鉢、11・12は椀形の高环で、12の脚部上半は筒状を呈する。13・14は器台で、両方とも环部に段を有し、外反する形態の口縁である。15は有孔鉢で口縁端部を折り返している。16～18は鉢で、16はハケメ調整であるが、17は内・外にミガキが施され、丁寧な作りとなっている。18は底部が高台のように突き出ており、木葉痕が残る。19～23は甕で、21～23は平底の甕である。いずれもハケメ調整が施される。また、口縁部の形態が直立に近いもの（21・22）と外反するもの（19・20・23）とに分かれる。なお、22は口縁の一部が片口状に成形されており、注口としての機能を備えていたものと考えられる。第28図1～15は壺で、1は直口壺の口縁部で赤彩が施される。2は広口壺の肩部から口縁部で、口縁が大きく外反する。口縁付近に一ヶ所、焼成前に内側から通した貫通孔がある。5は小型の直口壺であるが、全体にややゆがんでいる。壺はほとんどミガキ調整による仕上げであるが、13の広口壺のみ、ヘラケズリ調整となっている。第29図1～9は台付甕で、1～7はS字甕で、2・9は同一個体である。8は口縁部を欠くが、ハケメ調整や器壁の厚さ、台部先端の折り返しがみられる等の特徴から、同じくS字甕だと考えられる。ほとんどD類であるが、3は肩部に横走するハケメがみられることから、D類より古いB・C類と考えられる。第30図1～5は台付甕で、1・2・4はS字甕、3・5はく字甕である。いずれもハケメ調整が施されるが、5はハケメとヘラケズリを併用している。6は甕の口縁部から胴部で、台部の有無は不明のため、平底甕である可能性もある。7は小型の台付甕で、ヘラケズリ調整であることから、く字甕と考えられる。

52号溝からは1点掲載（第30図8、第4表、写真図版24）した。

第30図8は古墳時代後期の环で、口縁部から胴部にかけて残存している。口縁は横ナデ、胴部はヘラケズリを施し、境に段を有する。内面はナデで、黒色を呈する。6世紀前半。

53号溝からは1点掲載（第30図9、第4表、写真図版24）した。

第30図9は台付甕の台部で、台の端部を折り返しており、S字甕と考えられる。

遺構外から3点、表採資料から1点掲載（第30図10～13、第4表、写真図版24）した。

10はX-34230、Y20790グリッドで検出された甕で、ハケメ調整、内面はミガキ調整が施される。11

はX-34230、Y20790 グリッドで検出された有孔鉢で、口縁端部を折り返す。12はX-34245、Y20770 グリッドで検出された壺で、赤彩が施される。13は表採資料の壺で、ハケメ後にミガキが施される。

1号土坑からは1点掲載（第31図1・第32図、第4表、写真図版24）した。

第31図1は1号土坑に埋設された大型の広口壺である。胴部は球形で、小振りで扁平な円盤状の底部が付き、口縁部は緩やかに外側へ立ち上がる。外面は全体にミガキが施されており、赤彩も部分的に残る。内面は口縁部付近ではミガキが施され、底部付近にヘラケズリの痕跡がわずかに残る。内面の胴部上半は剥落等がひどく、調整は不明な点が多い。また外面には籠目状の模様が全体に残っており、発見当初は焼成時についた火襷と考えたが、類例を検索した結果、籠に包まれた土器が土中に埋められ、時が経過して籠が腐朽し消滅する過程で付いた籠の跡であることが分かった。

籠目（第31図下・第32図上下）は、壺の頸部から垂下し、底部に至る縱方向のもの（縱筋）と、胴部中位で横方向に走るもの（横筋）とに分けられる。縱筋は、壺を真上から見た時、中央（頸部）から外側（胴部中位）に向かって、右回りに弧を描くものと左回りに弧を描く、2種類の筋がある。これらは頸部に籠材を巻きつける方向（右・左回り）が反映したもので、底部付近で折り返したか結束されたと考えられるが、底部付近では籠目が明瞭でないため、詳細は不明である。横筋は胴部中位に痕跡が残っているが、らせん状に1周するもののみである。横筋の機能は、①縱筋の分解を防ぐための結束、②壺の運搬を容易にするための手掛けり等と考えられるが、痕跡を見る限り十全に機能したかは疑問が残る。単に痕跡として残らなかったことも考えねばならないが、③装飾的な意味合い、も可能性としてあげられよう。

籠材は残存していないため不明であるが、土器に残っている痕跡から幅8mm～1.6cm程度で、植物織維であった考えられることから、おそらく竹が用いられたと考えられる。なお、愛知県安城市の亀塚遺跡では、古墳時代前期の小壺を竹籠で覆って、頸部に桜の樹皮を巻いた事例（愛知県指定文化財）もあり、類例と考えられ、編み方もよく似ている。山梨県内では、甲府市桜田遺跡の方形周溝墓の周溝部から出土した壺形土器がある。弥生時代のもので底部が焼成前に穿孔されるなど、本例との相違点は多いが、頸部から底部にかけて隆帶で籠目を表現しており、この点は共通する。弥生時代の事例とはいえ、こうした祭祀的な意味合いの強い土器に籠目が表現されていることは、本例を考察する上で示唆的な事例であるといえる。また、土器内部の土にはオニゲルミの炭化核等が含まれていたことが自然科学分析によって判明している。

表 4 遺物觀察表

第4章 自然科学分析

第1節 熊野八反田遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

甲州市に所在する熊野八反田遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、1号住居から出土した炭化材8点と、2号住居から出土した炭化材3点、5号住居の炉から出土した炭化材1点の、計12点である。遺構の時期は、古墳時代前期と推測されている。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）と、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、クワ属、ウツギ属、ヤマハゼ、ムラサキシキブ属の6分類群が確認された。

遺構別の結果を表1、結果の一覧を付表1に示す。1号住居では、クヌギ節とコナラ節、クワ属、ウツギ属が確認された。2号住居ではヤマハゼとムラサキシキブ属が確認された。5号住居ではコナラ節が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版1 1a-1c (No.375)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は单一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靭で、加工困難である。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版1 2a-2c (No.370)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は单一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(3) クワ属 *Morus* クワ科 図版1 3a-3c (No.390)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は单一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、韌性に富む。

(4) ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図版2 4a-4c (No.369)

小型で丸い道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は異性で1～5列幅、高さは1mm以上で鞘細胞がある。

温帯に分布する落葉低木である。ヒメウツギとマルバウツギ、ツクシウツギ、ウメウツギ、ウツギ、ウラジロウツギがある。ウツギの材は、硬く耐久性がある。

(5) ヤマハゼ *Toxicodendron sylvestre* (Siebold et Zucc.) Kuntze ウルシ科 図版2 5a-5c (No.493)

大型の道管が、ほぼ単独でまばらに分布する散孔材である。晩材部でやや道管径を減ずる。道管の穿孔は单一である。軸方向柔組織は周囲状である。放射組織は1～3列幅程度で平伏細胞と方形細胞が混在する異性である。

ヤマハゼは温帯から亜熱帯に分布する落葉高木である。材の堅さは中庸である。

(6) ムラサキシキブ属 *Callicarpa* クマツヅラ科 図版2 6a-6c (No.494)

小型の道管が、単独もしくは数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は随伴散在状となる。道管の穿孔は单一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

ムラサキシキブ属は温帯から熱帯に分布する落葉または常緑の低木または小高木で、ヤブムラサキやムラサキシキブなど11種がある。

4. 考察

1号住居から出土した炭化材は、クヌギ節とコナラ節、クワ属、ウツギ属であった。これらはいずれも重硬な材である。用途は、出土状況から建築部材の可能性が考えられ、重硬な材が選択的に利用されたと推測される。

2号住居から出土した炭化材は、ヤマハゼとムラサキシキブ属であった。ヤマハゼはそれほど重硬な材ではなく、ムラサキシキブ属は低木～小高木である。用途は不明であるが、建築部材であれば屋根材に使用された可能性が考えられる。

5号住居から出土した炭化材はコナラ節で、炉から出土しているため燃料材と考えられる。

参考文献

平井信二（1996）木の大百科. 394p, 朝倉書店.

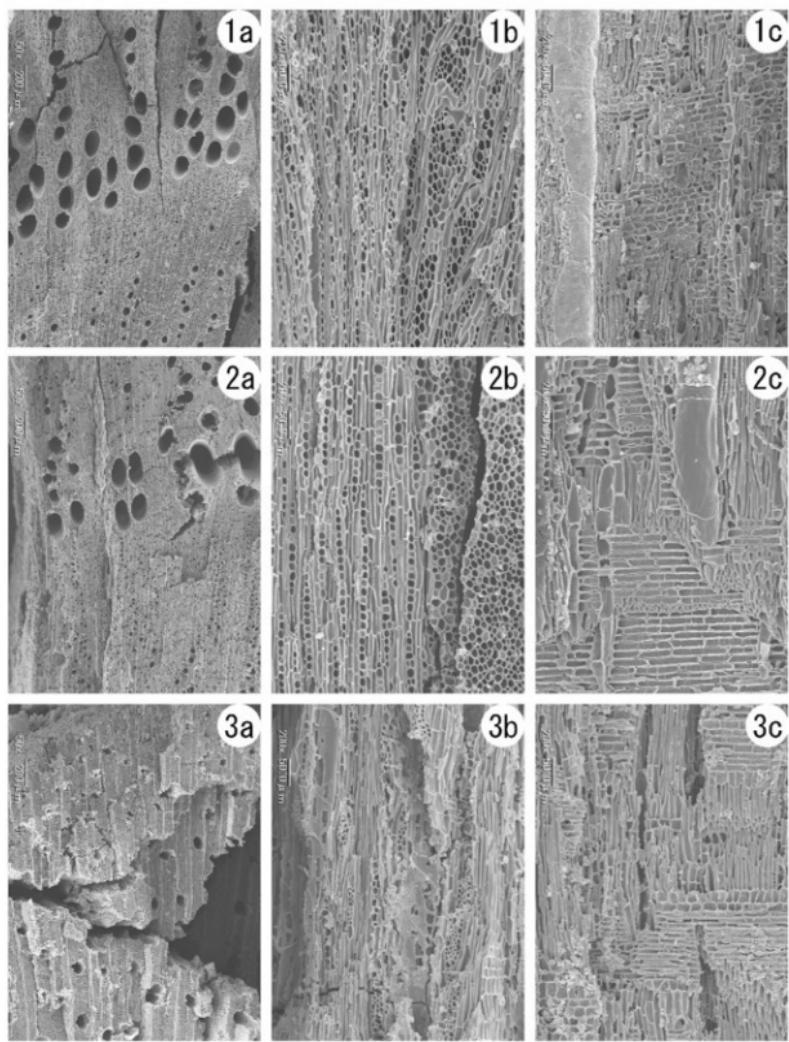
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌. 238p, 海青社.

表1 遺構別の樹種構成

樹種	1号住居	2号住居	5号住居	計
コナラ属クヌギ節	2			2
コナラ属コナラ節	3	1		4
クワ属	2			2
ウツギ属	1			1
ヤマハゼ		1		1
ムラサキシキブ属	2			2
計	8	3	1	12

付表1 樹種同定結果一覧

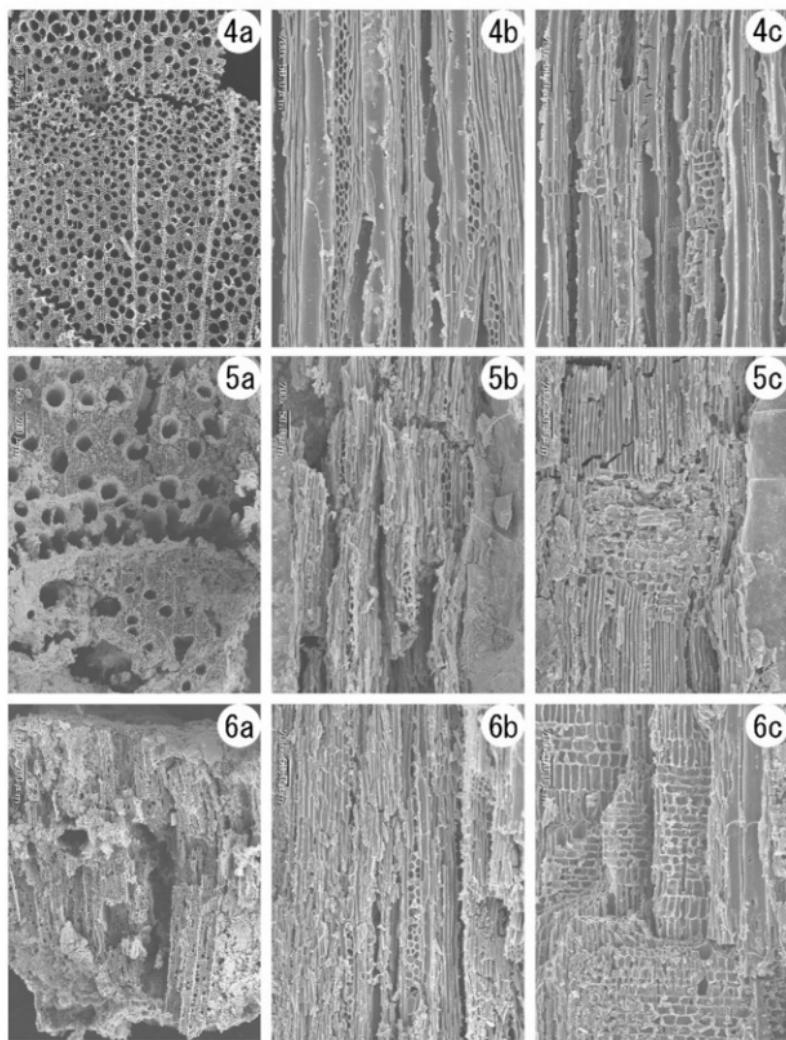
遺構	No.	樹種	形状	サイズ	年輪数	年代測定番号
1号住居	369	ウツギ属	破片	2cm角	不明	-
	370	コナラ属コナラ節	丸木?	半径2cm	5	PLD-28927
	374	クワ属	破片	1.5cm角	1	-
	375	コナラ属クヌギ節	破片	1.5cm角	3	-
	379	コナラ属クヌギ節	破片	1.5cm角	4	-
	390	クワ属	破片	2cm角	4	-
	398	コナラ属コナラ節	破片	1cm角	2	-
	405	コナラ属コナラ節	破片	1.5cm角	2	-
2号住居	493	ヤマハゼ	破片	1.5cm角	2	-
	494	ムラサキシキブ属	破片	1.5cm角	不明	-
	495	ムラサキシキブ属	破片	1.5cm角	不明	-
5号住居	炉	コナラ属コナラ節	破片	1cm角	8	PLD-28928



図版1 熊野八反田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c. コナラ属クヌギ節 (No. 375)、2a-2c. コナラ属コナラ節 (No. 370)、3a-3c. クワ属 (No. 390)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版2 熊野八反田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）

4a-4c. ウツギ属 (No. 369) 、5a-5c. ヤマハゼ (No. 493) 、6a-6c. ムラサキシキブ属 (No. 494)
a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

第2節 放射性炭素年代測定

バレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

1.はじめに

甲州市に所在する熊野八反田遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2.試料と方法

試料は、炭化材 2 点である。1 点は、1 号住居から出土した炭化材（No.370 : PLD-28927）で、最終形成年輪が残存していた。もう 1 点は、5 号住居の炉から出土した炭化材（PLD-28928）で、部位不明で最終形形成年輪は残存していなかった。調査所見によると、2 道構の時期は古墳時代前期と推定されている。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3.結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 (δ ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1 \sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.2（較正曲線データ : IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4.考察

各試料の歴年較正結果のうち 2 σ 歴年代範囲（確率 95.4%）に着目すると、1 号住居から出土した炭化材（No.370 : PLD-28927）は、252-305 cal AD (37.7%) および 311-388 cal AD (57.7%) であった。また、5 号住居の炉から出土した炭化材（PLD-28928）は、252-387 cal AD (95.4%) であった。どちらも 3 世紀中頃～4 世紀後半の歴年代であり、古墳時代前期に相当する。調査所見でも遺構の時期は古墳時代前期と推定されており、今回の測定結果と整合的である。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20、日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-28927	遺構：1号住居 試料No. 370	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N） 処理備考：状態悪い
PLD-28928	遺構：5号住居 位置：炉	種類：炭化材（コナラ属コナラ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N）

表2 放射性炭素年代測定および歴年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	歴年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を歴年代に較正した年代範囲	
				1σ 歴年代範囲	2σ 歴年代範囲
PLD-28927 1号住居 (No. 370)	-26.52 \pm 0.22	1719 \pm 21	1720 \pm 20	259-282 cal AD (24.1%) 324-356 cal AD (31.5%) 366-380 cal AD (12.6%)	252-305 cal AD (37.7%) 311-388 cal AD (57.7%)
PLD-28928 5号住居 (炉)	-27.14 \pm 0.30	1721 \pm 22	1720 \pm 20	258-285 cal AD (25.3%) 290-295 cal AD (3.2%) 322-355 cal AD (29.2%) 366-380 cal AD (10.5%)	252-387 cal AD (95.4%)

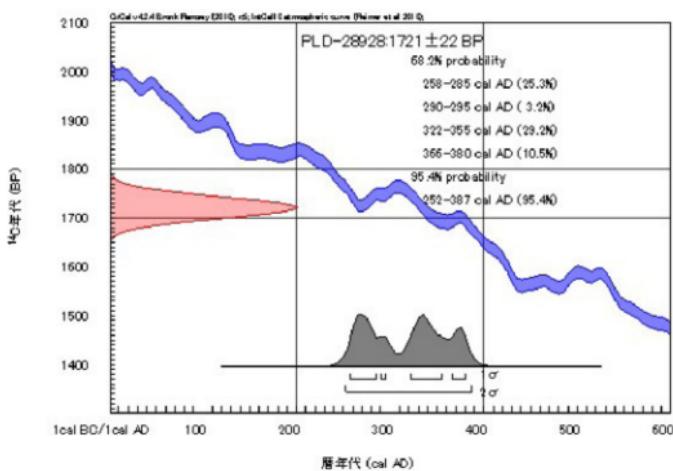
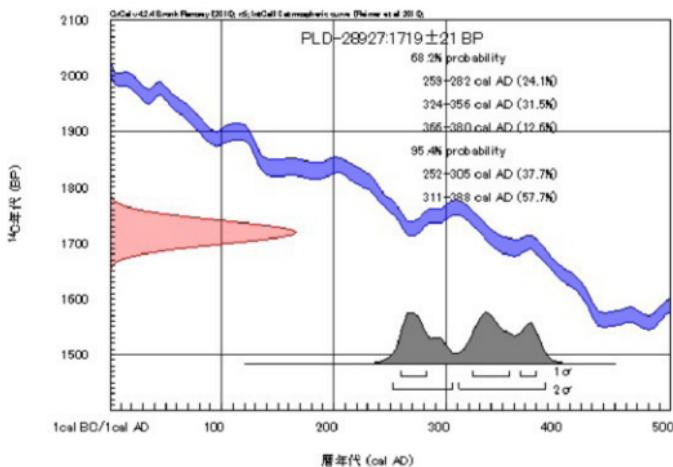


図1 历年較正結果

第3節 熊野八反田遺跡出土の炭化種実

佐々木由香・パンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1.はじめに

山梨県甲州市に位置する熊野八反田遺跡では、古墳時代を主体とする遺構が検出された。ここでは、遺構から得られた炭化種実の同定を行い、利用された種実について検討した。なお、同一遺構から採取された試料を用いて放射性炭素年代測定と炭化材の樹種同定も行われている（各分析の項参照）。

2.試料と方法

試料は、水洗選別済みの9試料である。遺構の内訳は、36溝から7試料、1号住居から1試料、1号土坑から1試料である。なお、1号住居は焼失住居である。考古学的な所見による遺構の時期は、いずれも4世紀後半である。1号住居から出土した炭化材（PLD-28927）の放射性炭素年代測定の結果では、252-305 cal AD (37.7%) および 311-388 cal AD (57.7%) の曆年が得られた（放射性炭素年代測定の項参照）。

土壌の採取から水洗、炭化物の抽出までの作業は、甲州市教育委員会によって行われた。水洗方法はフローテーション法で、浮遊した炭化物のみが肉眼で任意に抽出された。水洗量は不明である。種実の同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。試料は、甲州市教育委員会に保管されている。

3.結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核が得られた。このほかに、科以上の詳細な同定ができなかつた炭化種実を不明炭化種実とし、科以上に細分できる識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した虫えいが含まれていた。また、試料番号1080を除くすべての試料から炭化材片が得られた。表1に試料別の同定結果を示す。

以下に、炭化種実の産出傾向を遺構別に記載する。

36溝：オニグルミ核の破片1点が得られた。

1号住居：同定可能な種実は得られなかった。

1号土坑：オニグルミ核の破片1点、不明種実1点、同定不能種実の破片が2点得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) オニグルミ Juglans mandshurica Maxim. var. sieboldiana (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科

すべて破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の浅い縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖るものが多い。残存長2.9mm、残存幅2.2mmと、残存長3.0mm、残存幅2.3mm。

(2) 不明 Unknown 炭化種実

上面観は扁平な楕円形、側面観はいびつな楕円形。表面の組織は残存していない。大きさはイネ程度であるが、科以上に同定可能な識別点は残存していない。長さ4.1mm、幅2.7mm。

(3) 虫えい Gall

上面観は円形で、上下は平坦な楕円形。表面は粗い。残存長1.3mm、幅1.7mm。

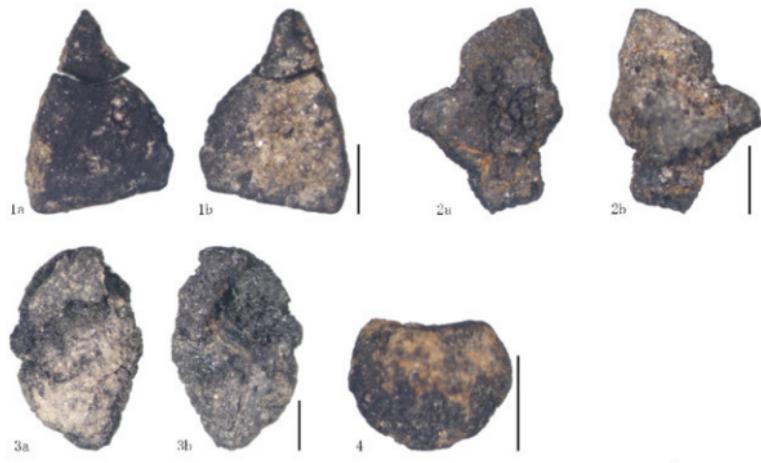
4. 考察

4世紀後半の遺構から得られた炭化種実を同定した結果、36溝と1号土坑から食用などに利用可能なオニグルミが得られた。オニグルミは核の部分が炭化していたため、オニグルミの殻を割った後に偶発的に炭化したか、不要な核を炉に入れて燃やすなどしてなんらかの理由で炭化した核が遺構内に堆積したと考えられる。なお、1号住居は焼失住居であるが、同定可能な種実はまったく得られなかった。

水洗量やフローテーションに用いられた篩のメッシュサイズが不明のため詳細はわからないが、回収された炭化種実は一辺2mm以上で比較的大きく、使用した道具によっては一辺2mm以下のアワなどの雑穀類は、含まれていたとしても回収されなかつた可能性がある。さらに、今回は浮遊物のみが回収されたため、水に浮かない大きな炭化種実が回収されなかつた可能性もある。今後、炭化物を含む土壤で最低でも1mm目の篩で一定量の水洗を行えば、当遺跡における古墳時代の植物利用について、より詳しい検討が可能になるとと考えられる。

表1 熊野八反田遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

分類群	遺構 時期	36溝							1号住居 (1)	1号土坑 (1)
		No.	575	596	623	625	628	829	1080	
オニグルミ	炭化核							(1)		
不明	炭化種実									1
同定不能	炭化種実									(2)
虫えい	炭化		(2)						(1)	(2)



スケール 4:1mm

図版1 熊野八反田遺跡から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核（36溝、No. 628）、2. オニグルミ炭化核（1号土坑、No. 923）、3. 不明炭化種実（1号土坑、No. 923）、4. 虫えい炭化（1号住居、No. 871）

第5章 総括

第1節 熊野八反田遺跡の年代について

熊野八反田遺跡で調査された遺構のうち、年代決定の基準となる遺物が検出された遺構は、1・2・3・5号住居、1・36・52・53号溝、1号土坑である。まず住居跡についてみてみると、いずれも平面形が方形ないし長方形を呈し、1・3・5号住居では住居中央付近に地床炉を持つ構造となっている。出土遺物は土師器台付壺・壺・小型丸底鉢などが共通して出土しており、いずれも古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。2・4号住居は詳細が分からぬ点も多いが、若干の出土遺物に古墳時代前期の土師器が含まれていることから、1・3・5号住居と同時代と考えて良いであろう。ただし、4号住居は3号住居に切られるため、段階としては一段階古い遺構となる。

1・3・5号住居については、住居の方位がいずれもN-20°-W前後で一定の間隔で配されており、相互に重複しておらず、住居の配置に計画性が窺われる。出土遺物は土師器を主体としており、県史編年のⅢ期（山梨県 1999）、小林編年のⅣ期（小林 2010）に相当し、古墳時代前期後半の4世紀後葉～5世紀前葉（県史）、ないし4世紀第3四半期～第4四半期（小林）に位置付けられる。また、第4章第2節にある放射性炭素年代測定の結果によれば、1・5号住居の炭化材で3世紀中頃～4世紀後半の年代が得られており、遺物の年代観とも整合する。これらを総合してみると、4世紀後半の年代を付与することができよう。

1・36・53号溝からは、住居と同様に古墳時代前期の土師器が出土しており、時期も4世紀後半のものと考えられる。52号溝も古墳時代の土師器片が主体であるが、古墳後期の壺が1点出土しており、6世紀前半以降の年代と考えられる。

1号土坑は36号溝を掘りこんで、大型の壺を半分ほど埋め込んだ遺構であることは先述したが、相互の時期差は埋没した覆土を観察する限り、小さいと考えられる。壺は球胴で、緩やかに立ち上がる單口縁の広口壺で、大型であることを除けば、相似形のプロポーションを持つ壺が古墳前期には見られ、4世紀後半代のものと考えられる。

第2節 焼失住居について—鎮火祭祀の可能性—

1号住居は大量の土師器と炭化材が検出された遺構で、焼失住居と考えられる（第12～14図）。第3章第3節でも触れたが、炭化材は1号住居の下層から検出している。これらは、住居の焼失・建材の倒壊などの痕跡であると考えられる。

遺物は住居南半に集中する傾向がみられ、そのうちA.炉の周辺に集中する一群、B.南東隅1ピット上面に集中する一群、C.南西隅3ピット上面に集中する一群に分かれ。また、A・Bは下層に堆積した炭化物よりも上層から検出され、Cは床面と同等レベルの炭化物を含む下層から検出されており、出土状況に相違がみられる。このことから、A・Bは住居倒壊後あるいは焼失後に置かれたもの、Cは住居焼失直前まで住居内に存在したものと考えられる。炭化材は炉周辺のものが最も残りが良く、住居の外縁からはほとんど検出されない傾向が見られた。

石野博信はこうした火災を受けた住居について、「古墳時代以降の火災類型の多様さと祭祀遺物の存在によって鎮火祭祀の可能性を考えたが、祭祀用具が火をうけていれば消防活動中の祭祀を、火をうけていなければ鎮火後の祭祀を、それぞれ想定しうる」とし、鎮火祭祀の可能性について言及している。しかし、「祭祀遺物の出土する場所が必ずしも祭祀を行った場所でなく、他で祭祀を行ない、祭祀用具を火災住居の凹地に埋納することもありうる」として、立証の困難さについても言及している（石野 1991）。

1号住居出土遺物のA群、B群のうち、完形に近いものは高環2、器台1、鉢2、丸底鉢1、S字甕、台付甕等で、供獻用土器とされる高環・器台・丸底鉢などが含まれていることから、今回の調査事例も、鎮火後の祭祀が行われた焼失住居の類例の一つとして、検討に足る材料となるのではないかと思われる。

なお、鎮火祭祀の意義については、西原雄大は①他の住居への類焼を防ぐための計画的住居解体に伴うもの、②伝染病の滅菌または有力者の死に伴うもの、③『魏志倭人伝』等の文献の記述から、当時の宗教観、鬼道、神獸の庇護・悪鬼の忌避等を想定している（西原 2003）。祭祀の原因や理由はともあれ偶発的な火災でない場合は、広い意味において①の計画的住居解体ということになる。1号住居の場合は、床面から検出されたC群があり、これらの土器群を「持ち出せなかった」と考えれば偶発的とできるが、「持ち出せなかった」あるいは「鎮火後に置いた」とすれば計画的であるともいえ、判然としがたい。しかし、火事は人間にとて災害であり、鎮火後にこうした厄災が二度と起こらないように祭祀を行った、とする解釈もあり得るであろう。いずれにせよ、様々なパターンがあったと考えられ、本例もその一つであるといえよう。

第3節 並行溝群の性格について

調査区の北側で、並行する小規模な溝群（2～30、32、41～50号溝）（第6～8図）が検出されている。長さはまちまちで、長いもので9m以上、短いもので1m弱、幅は20～30cm程度、深さは10～20cm程度のものが多い。重複する溝もあるが、ほとんどその新旧関係を明らかにしえず、出土遺物も少ない。また、溝と溝の間は一定間隔である傾向があり、重複の無い西側の溝群を例に見てみると、32号溝から以西は、ほぼ80～90cmの間隔を置いて溝が掘られており、弧状にカーブする溝（41号溝）の隣の溝（42号溝）も、呼応するように弧状にカーブしているなど、これらの溝群は相互に連続的な性格をもつものと考えられる。したがって、区画や水路等の機能をもった溝とは考えられない。

こうした特徴をもった溝群は、県内の調査事例（都留市鷹ノ巣遺跡、南アルプス市村前東A遺跡、百々遺跡、野牛島・大塚遺跡）からも類例を見つけることができ、畝状遺構、または耕作痕状遺構（平野 2011）とされる。本例の溝群も、畝等、畑作に関わる遺構であると解釈したい。

溝群の年代であるが、出土した遺物が少量なため判然としないが、①古墳前期のS字甕の小片等が含まれるほか、その後の時代の遺物の混入がないこと、②竪穴住居跡など、古墳前期の遺構と同じ確認面から検出されており、上層からの掘り込みではないこと（写真図版12 調査区北壁と24号溝土層断面）、以上2点から、古墳前期の遺構であると考えざるをえない。

第4節 36号溝と1号土坑—流路廃絶に伴う供獻行為についての考察—

調査区南西から検出された36号溝（第11・20～23図）は、長さ約19.22m以上、幅約6.8m以上、深さは最深部で約60cmを測る大型の溝で、下層に砂粒、小礫（大きても拳大）、酸化鉄分等が認められることから、水が南へ流下する溝であったと考えられるが、調査区は北東隅から南西隅にかけて緩やかに低く傾斜する地形となっており、溝の断面形は皿形で、おそらく自然流路跡と考えられる。また、この流路は幅広で浅く、砂礫が底面では顕著にみられるものの主体ではなく、流れ込んだ程度の客体的な物量であることから、水勢がゆるやかで短期間だけ機能していたものではないかと考えられる。

この流路で注目される点は、多量の土師器が検出されたことで、器種も台付甕、甕、壺、鉢、有孔鉢、小型丸底鉢、高杯、器台と多彩であり、古墳時代前期のものである。多くは破片となっているが、一定数の完形品が存在することも特徴の一つである。これらの遺物はほとんど溝の下層から検出されるものであるが、溝の底面よりは若干浮いたところで出土しており、底面に密着するような出土遺物は少ない傾向にある。また、上層を観察すると、主体となっているのは2層とした黒褐色上で、これ以上細かに分層することが困難であり、いわゆるレンズ状堆積と呼ばれるような自然埋没の痕跡を見つけることはできなかつた。言い換えると、36号溝は人為的に埋められた可能性があるとみなすことができ、出土した土器は、この溝を埋める過程で入り込んだものと考えられる。なお、調査区内に限ってではあるが、古墳時代から時代の降る遺物は検出されておらず、その後、洪水等が原因と思われる砂質土（1層）が堆積してしまうため、少なくとも洪水等による砂質土が形成される以前に溝が埋没していたことがわかる。

このような大型の溝または谷等から古墳時代前期の土師器が多量に出土する事例は、山梨市足原田遺跡や甲州市西田遺跡などにも事例があり、該期の遺跡において普遍的におこる現象といえるのかもしれないが、なぜ、こうした流路や谷等から遺物が多量にまとまって検出されるのだろうか、多少の考察を試みてみたい。

まず、こうした場は「土器捨て場」であると解釈される傾向が強い。それは広義において決して誤った解釈ではないが、より狭義においてはどうだろうか。仮に「土器捨て場」であるとするならば、①何故、その場所を選ぶのか、②何故完形品が捨てられるのかという疑問が残る。捨てる場所が他になかった誤でない以上、その行動には何らかの規範が伴うはずである。そこで、36号溝の例を見ると、X-34235、Y20770付近に完形の土器が集中する一群がある。この土器群はS字甕、台付甕、鉢、有孔鉢、器台、小型の直口壺、片口状口縁の壺があり、やや離れて小型の壺や小型丸底鉢などがあって、日常的な生活に用いたと考えられる甕、鉢、壺などのほか、供獻用の土器とされる小型丸底鉢、器台がある。これらの土器はほぼ完形であって、溝中央の底面近くにまとめて検出されたもので、欠損等の原因で廃棄物として投げ込まれたものではなく、意図をもってまとめて置かれたものであると推測できる。単なる廃棄ならば、「完形品」が「まとまっている」との説明がつかない。

また、まとまっているものでも、おそらく単独で置かれたとみられる完形品もいくつかみられ、溝中央から東側へ一段高い、岸に近い部分に数点存在しており、1号土坑出土の大型壺も、このような36号溝の岸辺付近に位置している「単独の完形品」であるといえる（第11・20・31・32図）。36号溝出土遺物と1号土坑大型壺との違いは明確で、36号溝の遺物が「生活に関わる遺物」であるとするならば、1号土坑大型壺は竪穴住居などの生活遺構からは類例をみない、「特殊な遺物」であるという点である。また、大型壺は36号溝を掘り込んで埋納されていたもので、この点も36号溝出土遺物と性格が異なる。

以上のような状況を整理すると、①36号溝はもとは自然流路であったが、人為的に埋められた。②出

土遺物は溝底面からの出土ではなく、下層底面付近から上層にかけて出土している。③古墳前期を降る遺物は調査区内に限り出土しておらず、その後、洪水等の理由による砂質土層が溝覆土上に堆積する。④破片資料も多いが、下層に完形品が存在し、群となるものと単独品がある。⑤完形品には日常生活用の土器と供獻など祭祀的な要素をもつ土器がある。⑥36号溝を掘り込んで埋められた大型壺（1号土坑）は、類例希少な特殊遺物であると考えられる、となる。①・②から推定できることは、「流路の廃絶」であり、③から、廃絶の時期は古墳前期、それも土器の年代観から4世紀後半以降の出来事であり、②・④・⑤から流路廃絶に伴う祭祀儀礼の可能性を示唆することができ、⑥から36号溝が埋まった後の祭祀行為を想定することができる。

古墳時代前期は鉄製農耕具などの普及とともに各地で開発が行われた時代で、熊野八反田遺跡に営まれた集落でも、田畠の開発のため、水路改修や付け替え、導水など必要に応じて盛んに行われたものと考えられる。「水」は生きるのに必要な物質であるだけでなく、田畠の營為に欠かせない大切なものであり、一方で大雨が降ればたちまち災害をもたらす脅威でもあった。井戸の廃絶に伴って行われる祭祀のように、36号溝のような流路の廃絶に際しても、水神の怒りを鎮めるべく、完形土器に食物を満たして供獻等の祭祀行為を行ったのではないだろうか。牽強付会のきらいもあるうが、一つの仮説としたい。

なお、僅少ではあるが、36号溝出土遺物で完形品がまとまっていた一群中のS字壺と1号土坑大型壺の中から、食用に利用可能なオニグルミ（炭化核）が得られており、示唆的な材料であるといえる。

第5節　まとめ

熊野八反田遺跡は古墳時代前期（4世紀後半頃）の集落遺跡であり、集落を構成する堅穴住居のほか、多数の耕作痕跡遺構、流路跡などが検出された。出土遺物の年代がほぼ4世紀後半頃に限定されており、遺物が無く年代不明の遺構は除いて、ほぼ同時代の遺構群であると考えられる。第3章第2節の層序で述べたように、包含層の上層は砂層・砂質土層となっており、この集落は洪水等に起因すると考えられる砂によって埋没してしまう。洪水が集落の廃絶の直接の原因ではないが、水害が身近な脅威として認識されていたであろうことは、想像に難くないであろう。

また、同時代には熊野八反田遺跡から西へ1kmほどの位置に古墳前期の集落遺跡として著名な西田遺跡があり、そこでは60軒以上の堅穴住居跡と方形周溝墓が検出されており、熊野八反田遺跡も全体では数十件単位の集落だったのではないかと推察される。該期以降の遺構は流路と考えられるような溝（33・34号溝など）しかなく、その後は集落域など生活の拠点とはならなかったと考えられる。古墳時代中期・後期の遺跡は極端に少ないため、その時期の状況は詳らかではないが、熊野八反田遺跡から南西へ約1km、重川右岸に古墳時代後期の遺物が発見された北田中遺跡があるのみである。奈良・平安時代になると、今回の調査区から北東へ約150mの位置に数十軒以上の規模を有する集落（五反田遺跡）が営まれるようになる。

古墳時代前期、火災や水害等の災害に向き合い、畏れ、あるいは祀りながら、当地を開拓していく人々やその後継者達が、定住と移動を繰り返しながら、やがて平安時代に至って大規模な集落を営み、古代於曾郷の一翼を担っていたと考えられる。それは今日に至る熊野の発展の基礎を築いたと言っても過言ではなく、熊野の歴史を語る上で欠くことのできない人々の生きた証しそのものであろう。

引用・参考文献

【論考】

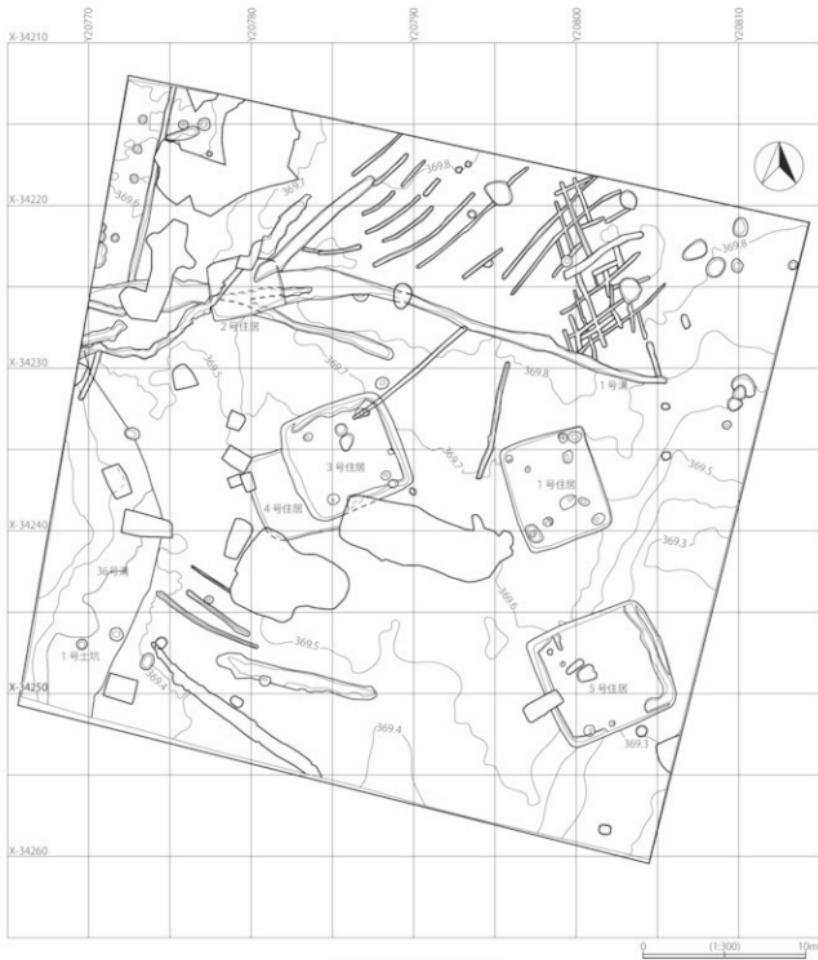
- 石野博信 1991『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館（第二刷）
鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
西原雄大 2003『滋賀県の焼失住居と弥生・古墳時代住居における鎮火祭祀について』『月刊考古学ジャーナル』11 No.509
小林健二 2010『古墳時代における甲斐の地域社会—土器編年と墳墓の変遷—』『山梨県考古学協会誌』第19号

【調査報告書】

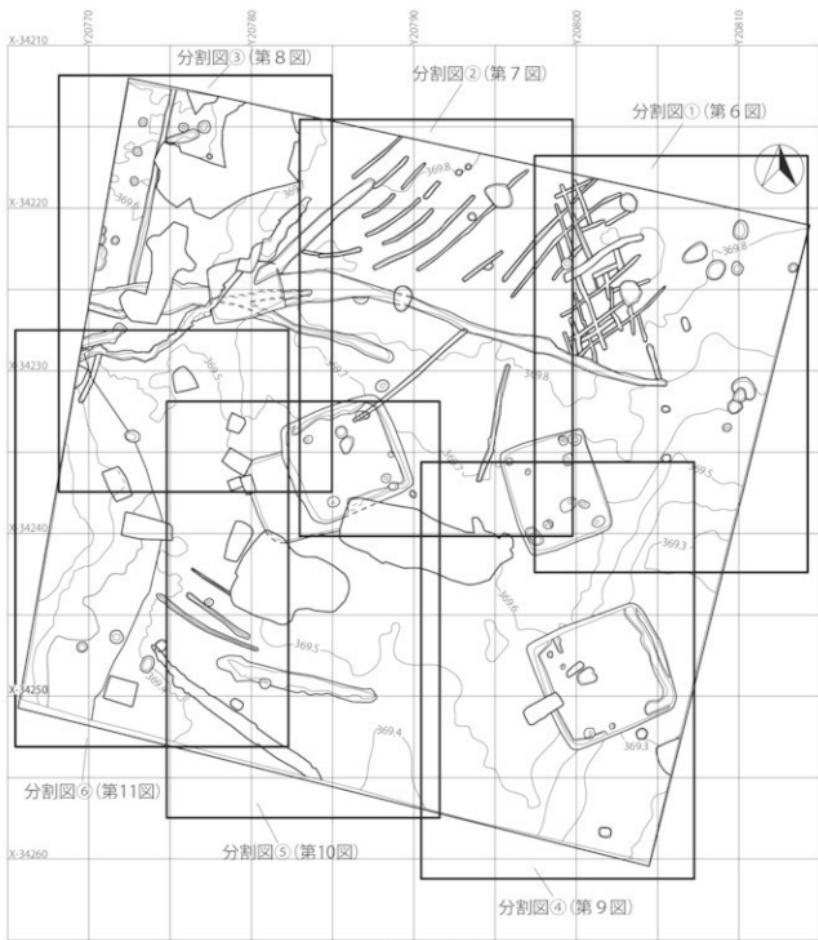
- 赤塚次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集
米田明訓ほか 1991『獅子之前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第61集
高野玄明ほか 1995『榎田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第105集
坂本美夫 1997『西田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第138集
小野正文ほか 1997『一ノ坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第141集
三田村美彦ほか 1999『村前東A遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第157集
斎藤秀樹 2000『野牛島・大塚遺跡』八田村文化財調査報告書 第2集
吉岡弘樹ほか 2002『五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第194集
保坂和博ほか 2002『下西畠遺跡 西畠遺跡 影井遺跡 保坂家屋敷墓』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第196集
石神孝子ほか 2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第205集
今福利恵ほか 2004『百々遺跡3・5』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第213集
山本茂樹ほか 2005『足原田遺跡I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第230集
田口明子ほか 2007『足原田遺跡II』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第246集
村石真澄ほか 2008『西畠B遺跡 北田中遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第252集
平野修 2011『鷹の巣遺跡』都留市埋蔵文化財調査報告 第14集
櫛原功一ほか 2012『梶畠B遺跡』甲州市文化財調査報告書 第10集

【その他】

- 竹内理三ほか 1984『角川日本地名大辞典』19 山梨県 角川書店
塩山市史編さん委員会 1996『塩山市史』文化財編 塩山市
山梨県 1998『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）
山梨県 1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）
篠原和大 2009「上戸モミダ遺跡の籠付壺形土器」「藤枝市史だより」第20号
櫛原功一 2013『五反田遺跡』『山梨考古』第130号 2013年上半期遺跡調査発表会要旨
入江俊行 2014『熊野八反田遺跡』『山梨考古』第133号 2014年上半期遺跡調査発表会要旨

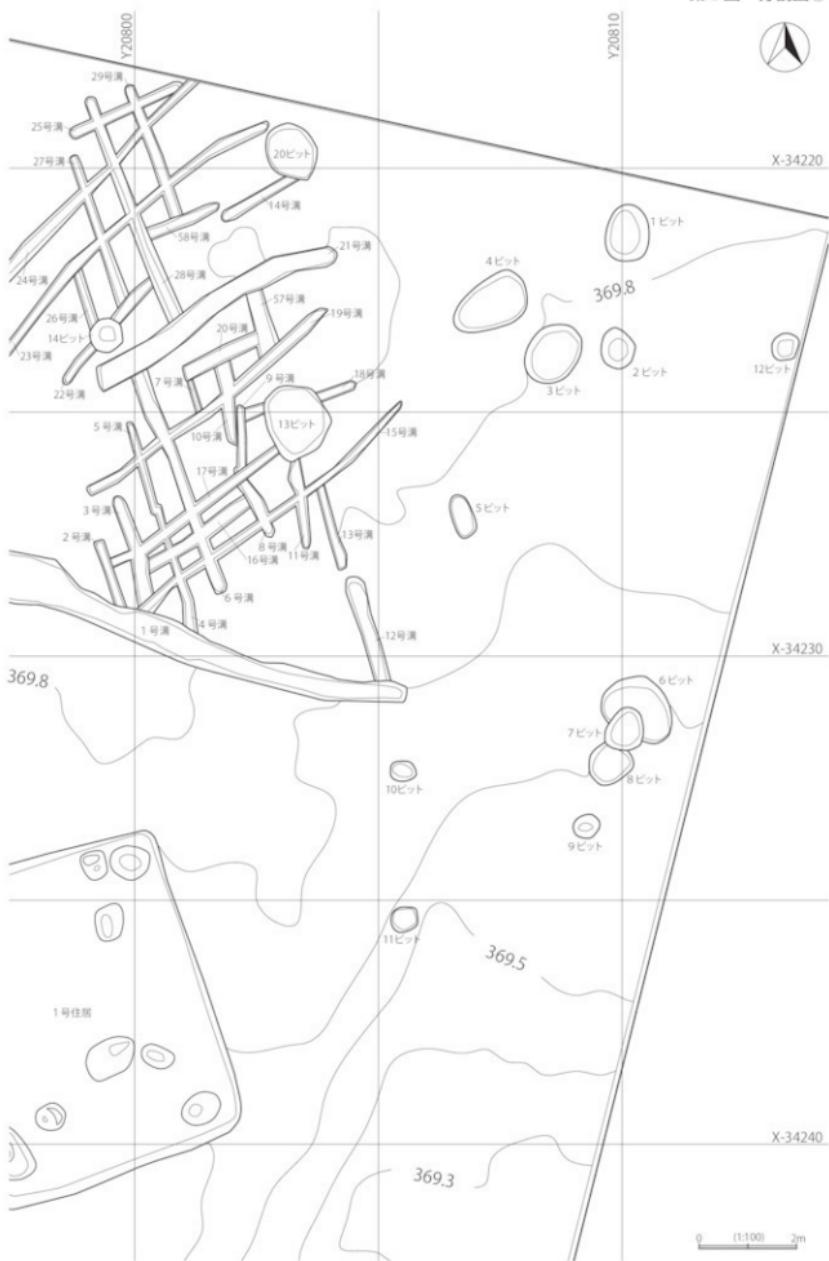


第4図 調査区全体図

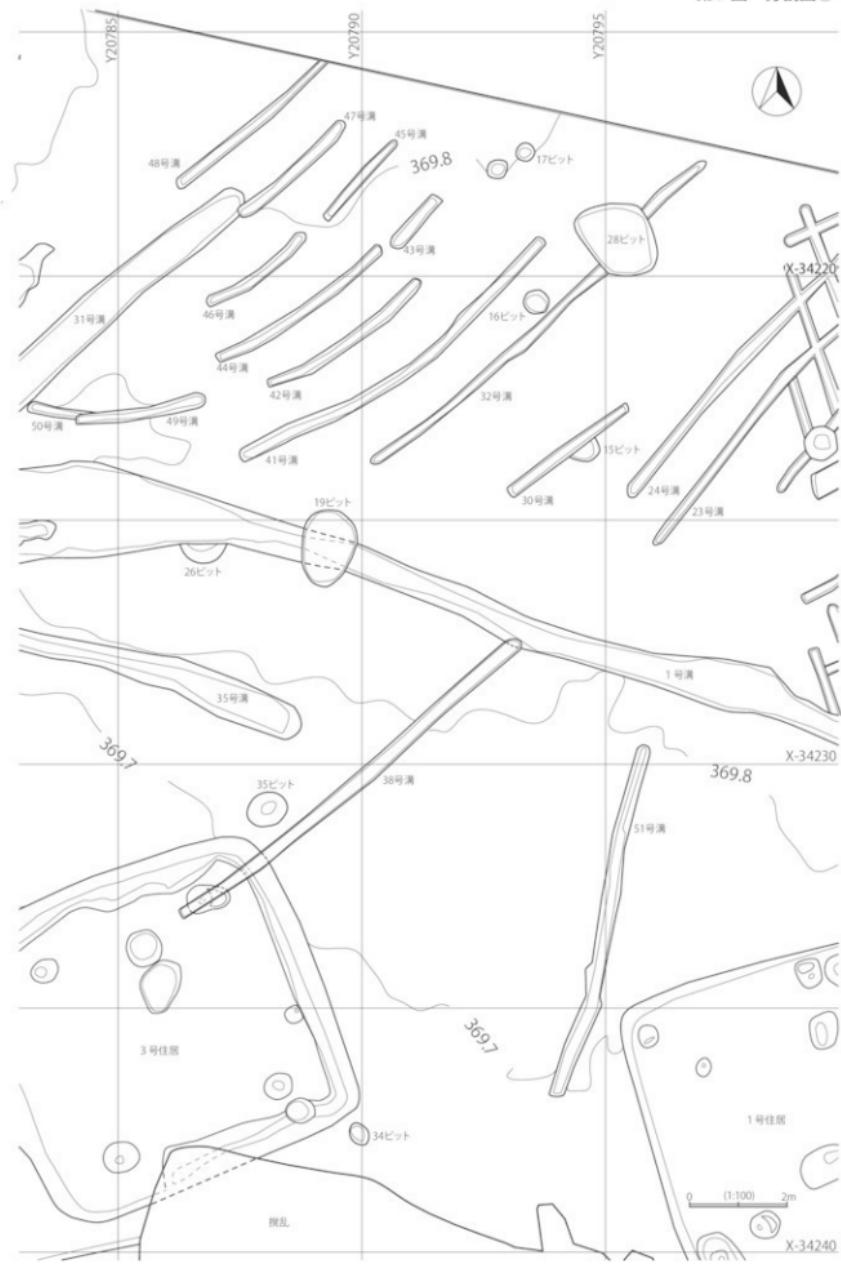


第5図 調査区分割指示図

第6図 分割図①



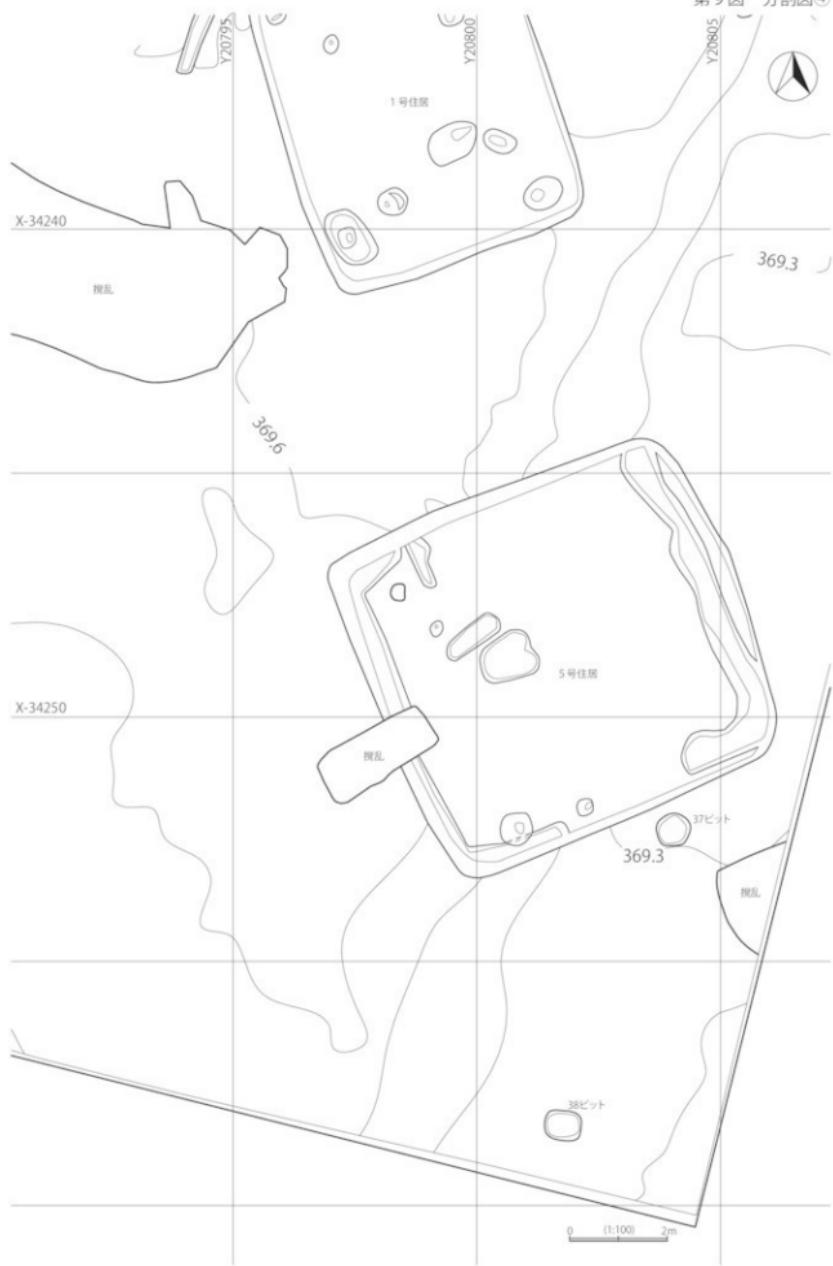
第7図 分割図②



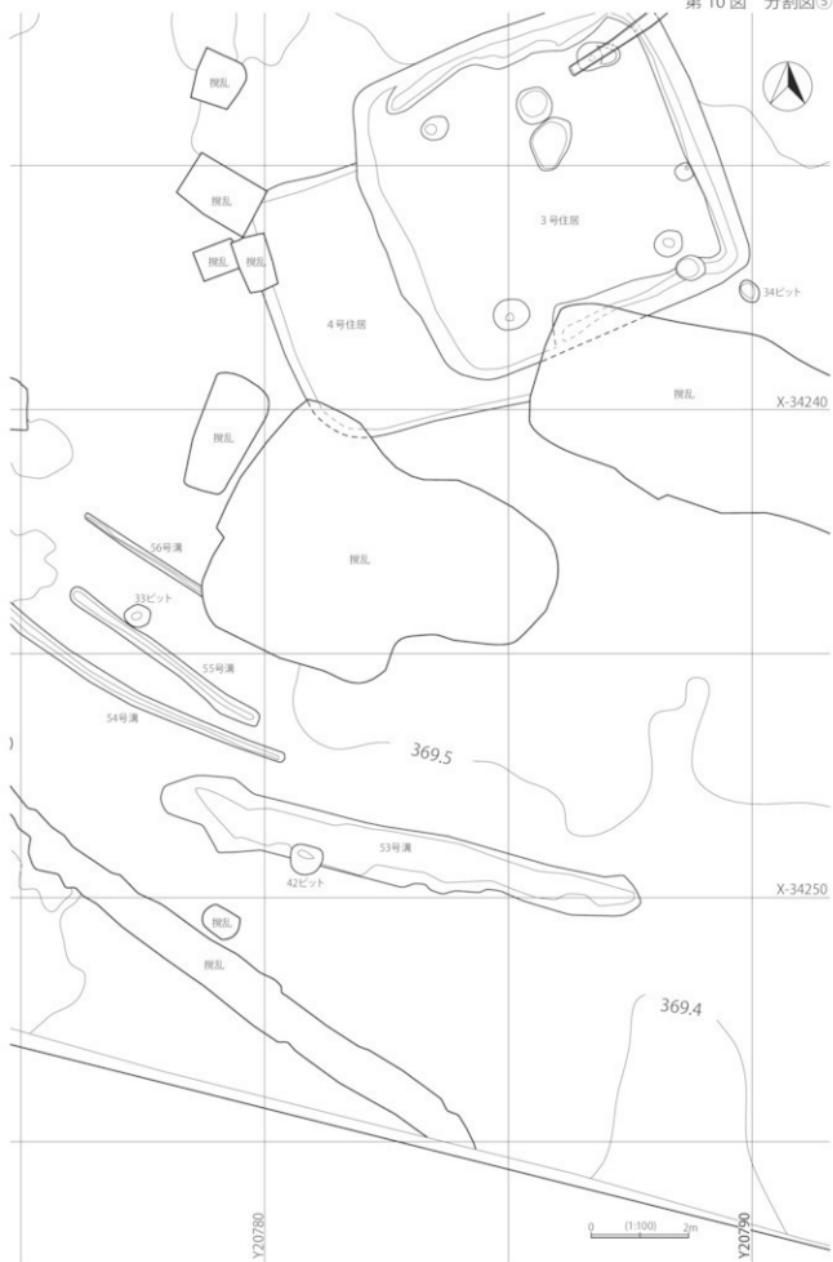
第8図 分割図③



第9図 分割図④

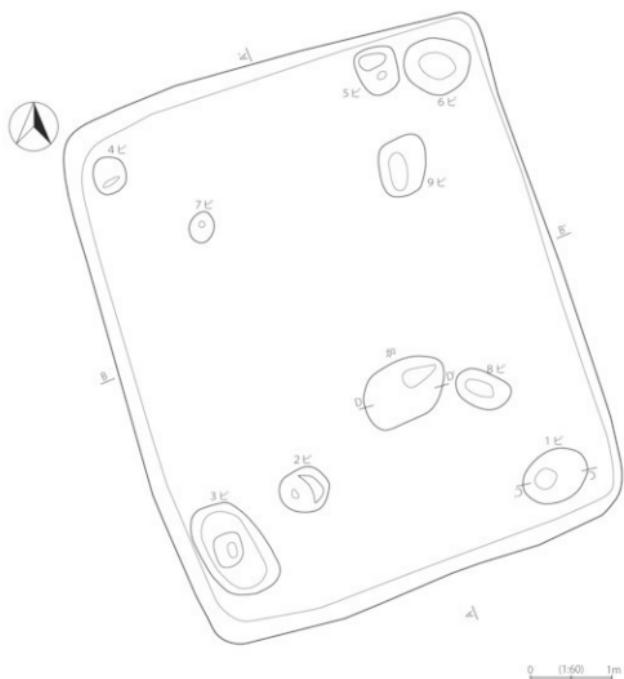


第10図 分割図⑤



第11図 分割図⑥





1号住
 1. 暗灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。
 2. 黒褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。
 3. 暗灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック多量含む。
 4. 暗灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック少量含む。
 5. 明灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック含む。
 6. 暗灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック少量含む。

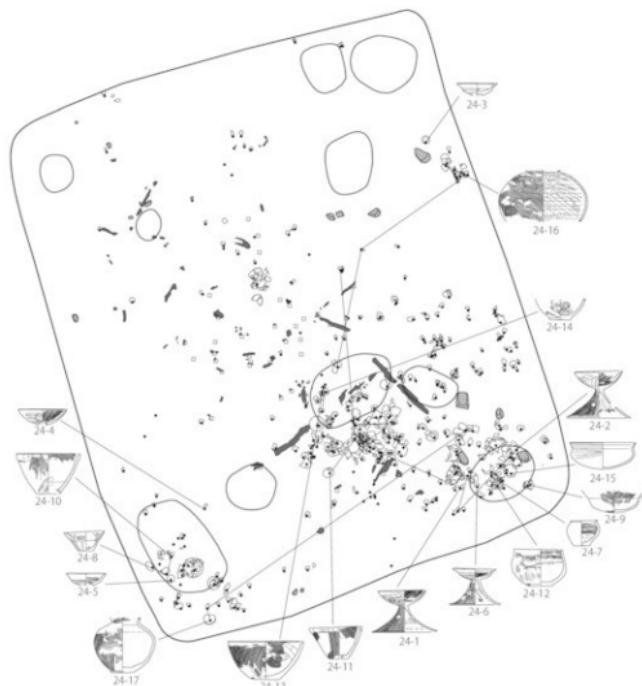


1号住 1ピット
 1. 暗灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック微量含む。
 2. 明灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック含む。

1号住 2
 1. 暗褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。壤土・炭化物少量含む。
 2. 暗褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。壤土・炭化物少量含む。
 3. 明灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック含む。

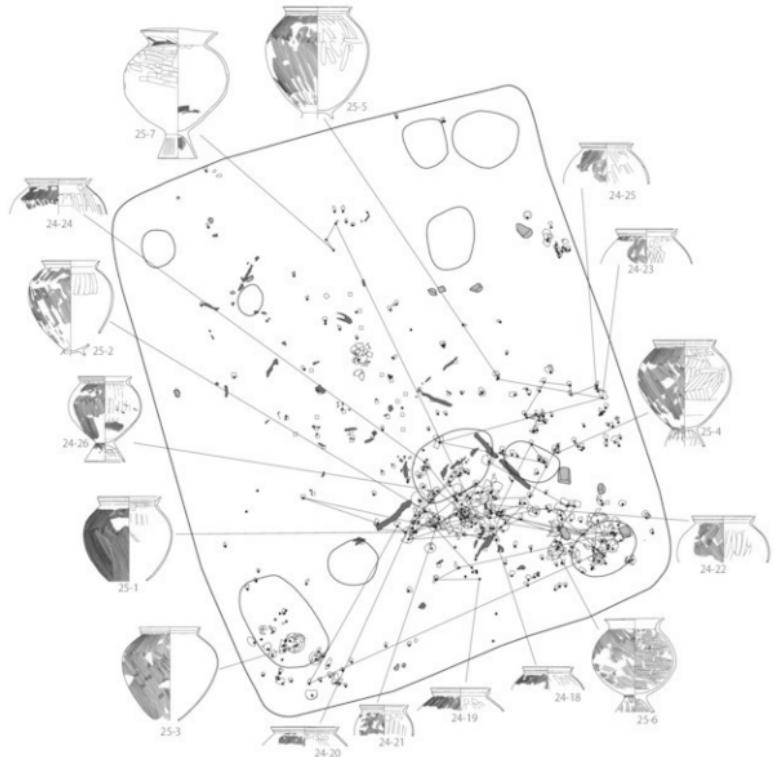


第12図 1号住居平面図



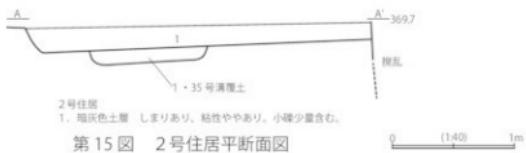
第13図 1号住居遺物出土状況図（甕以外）

0 (1:60) 1m

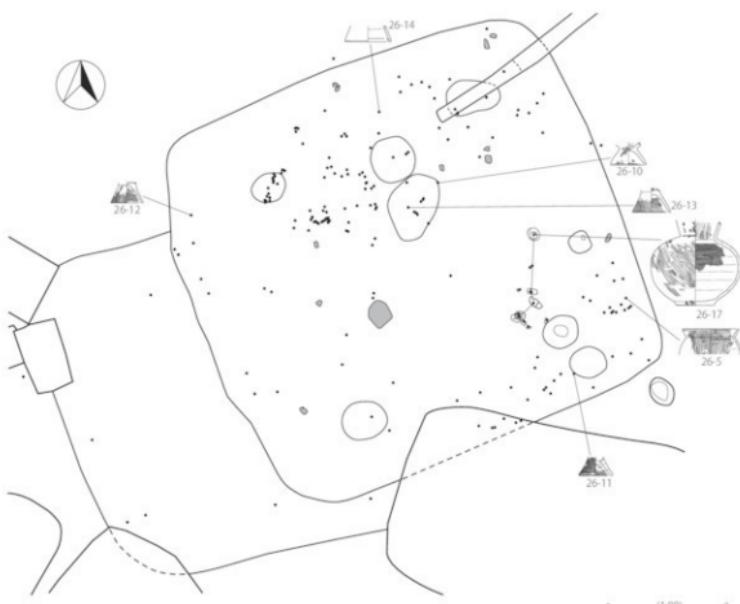
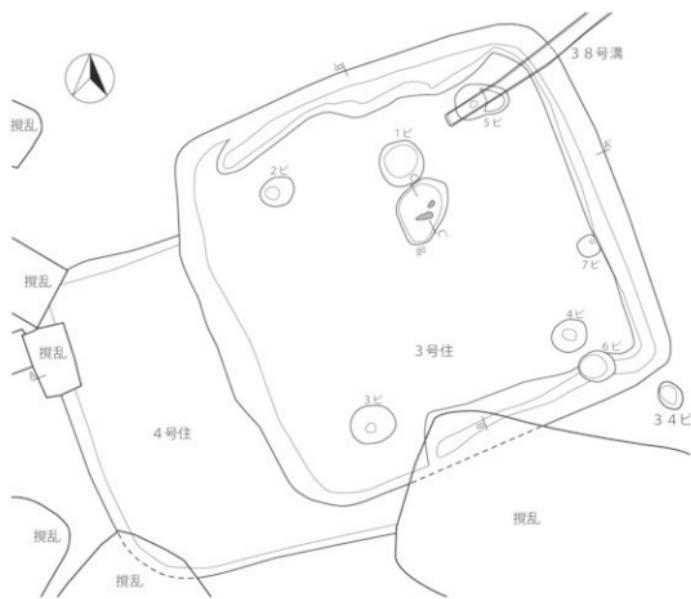


第14図 1号住居遺物出土状況図(竈)

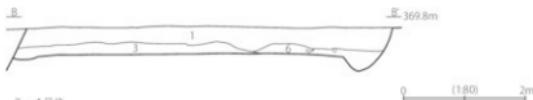
0 (1:60) 1m



第15図 2号住居平面図



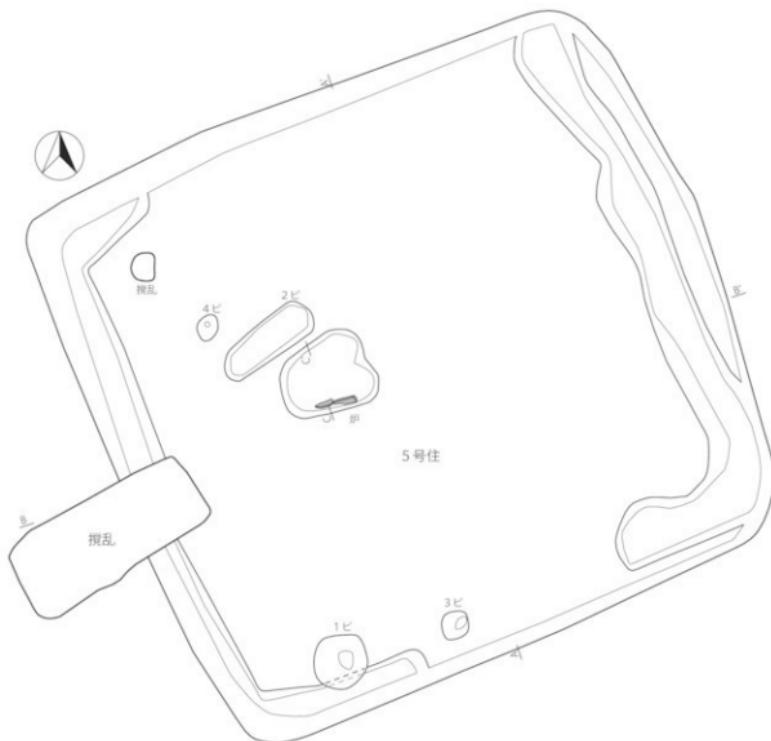
第16図 3・4号住居平面図・遺物出土状況図



- 3・4号住
 1. 鮎灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。小礫微量含む。3住。
 2. 黒褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。3住。
 3. 黒褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック含む。3住。
 4. 鮎灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック少量含む。4住。
 5. 明灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック含む。4住。
 6. 黒褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。小礫微量含む。3住。

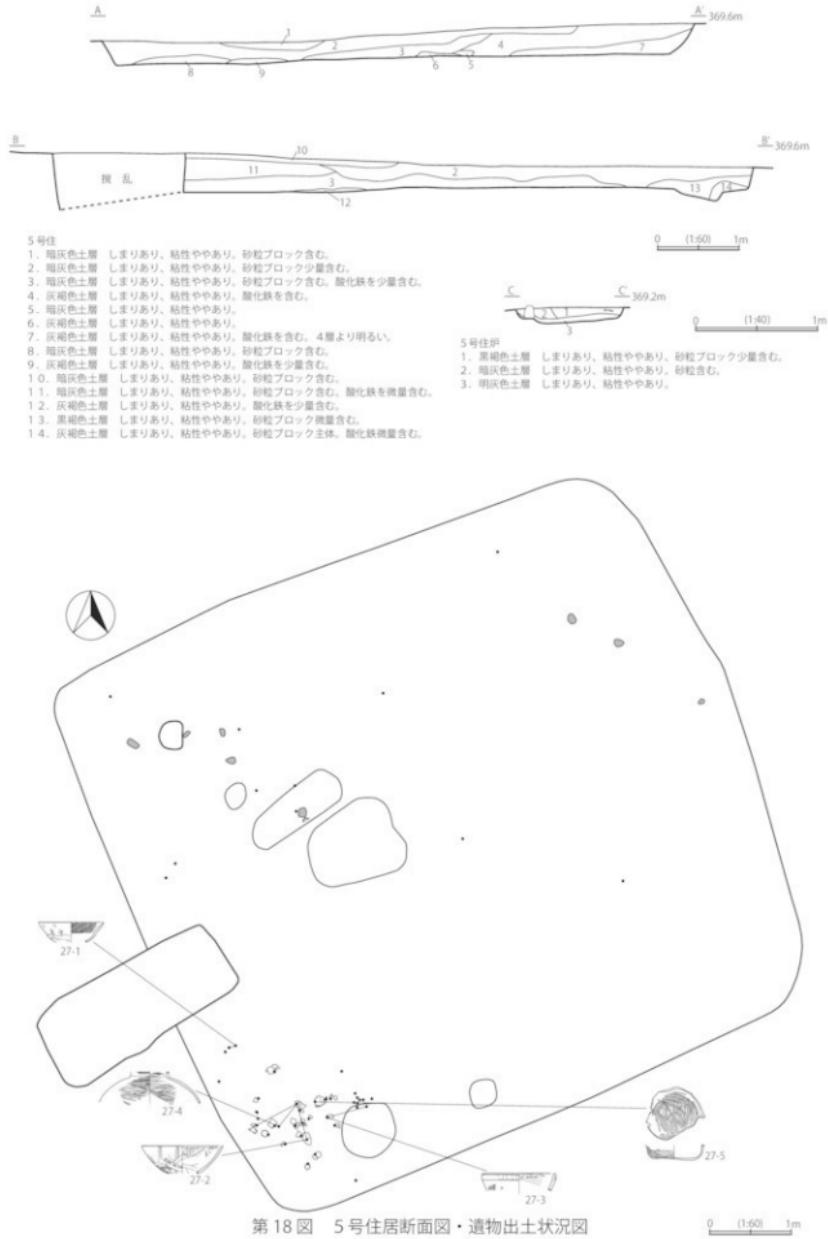


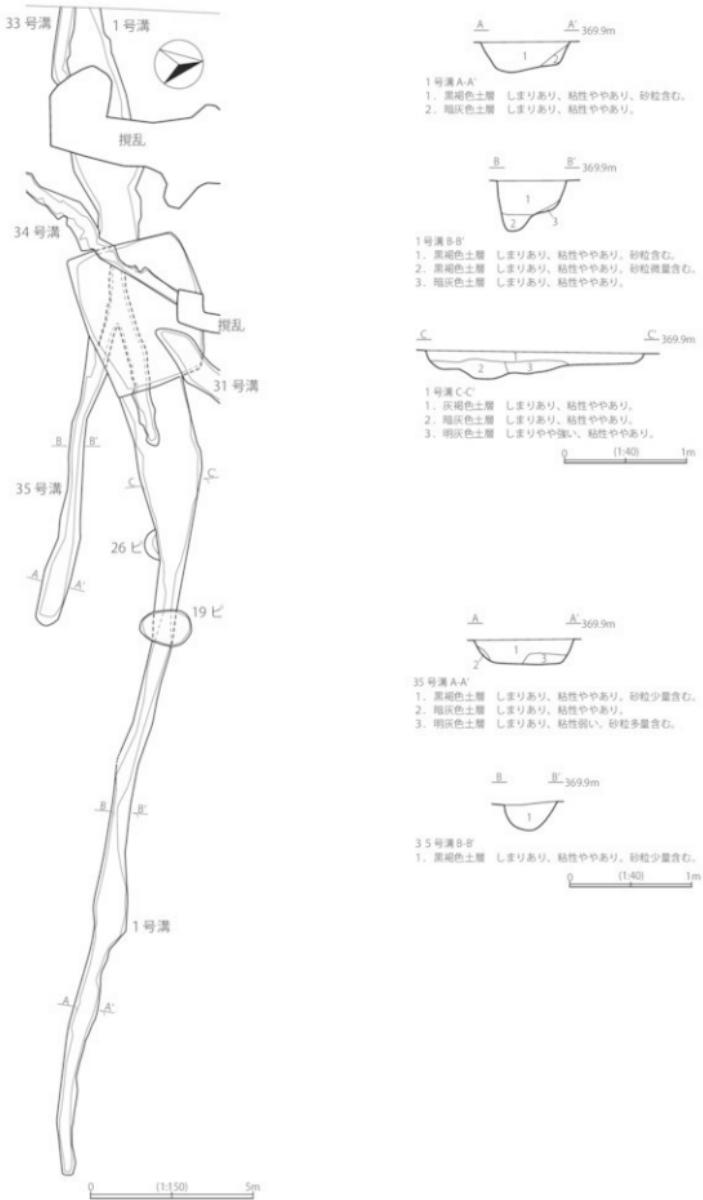
- 3号住
 1. 鮎灰色土層 しまりあり、粘性ややあり。砂粒ブロック少量含む。



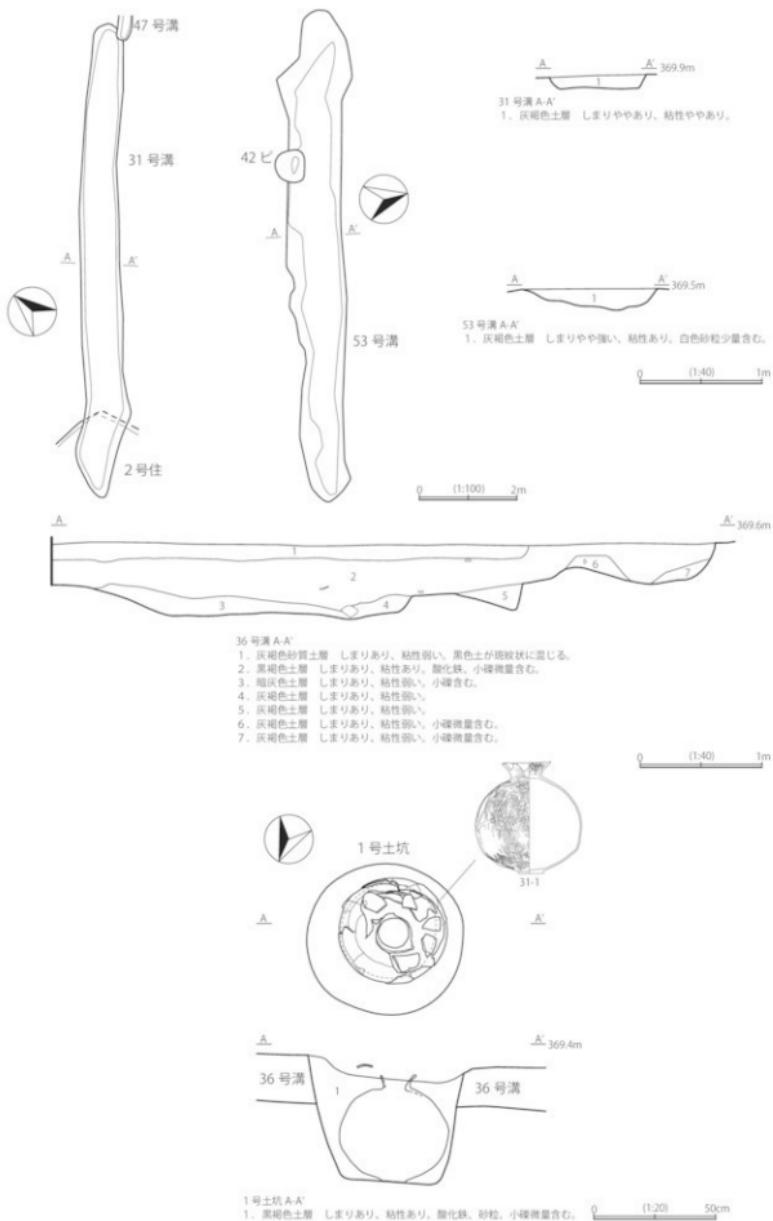
第17図 3・4号住居断面図・5号住居平面図







第19図 1・35号溝断面図



第20図 31・53号溝・1号土坑平断面図・36号溝断面図



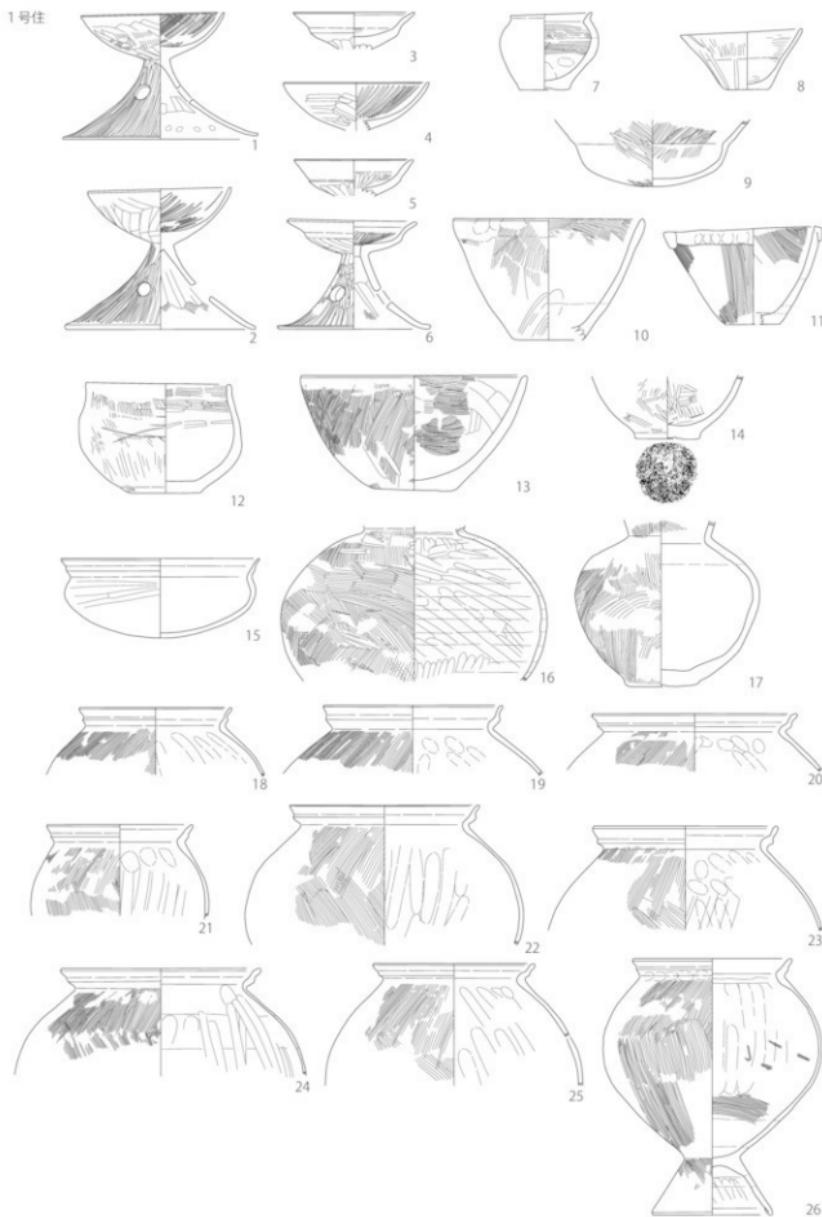
第21図 36号溝平面図 0 (1:100) 2m



第 22 図 36 号溝遺物出土状況図（甕以外）

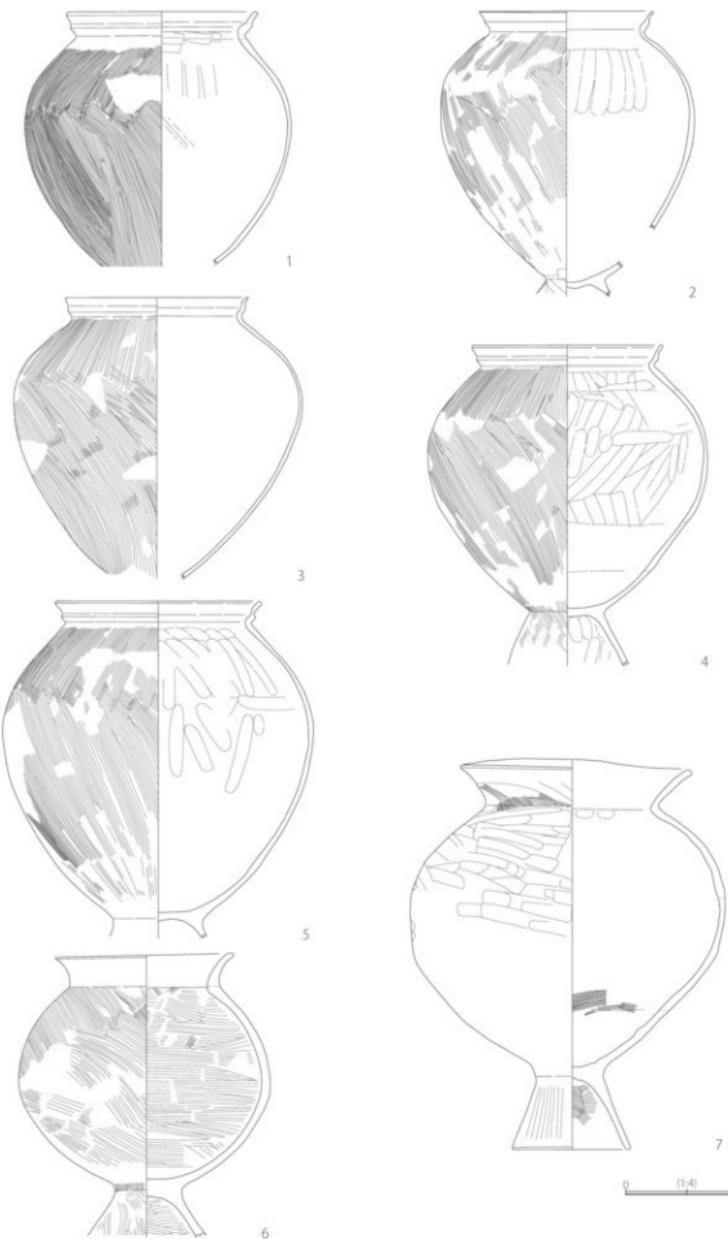


第23図 36号溝遺物出土状況図（甕）



第24図 1号住居出土遺物（1）

0 10cm 1:4



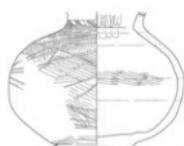
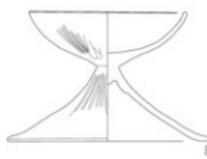
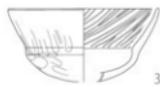
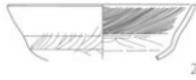
第25図 1号住居出土遺物（2）

2号住

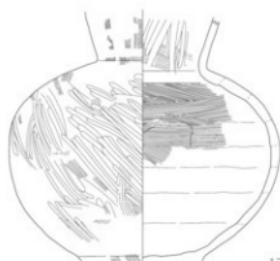


2号住(1)

3号住

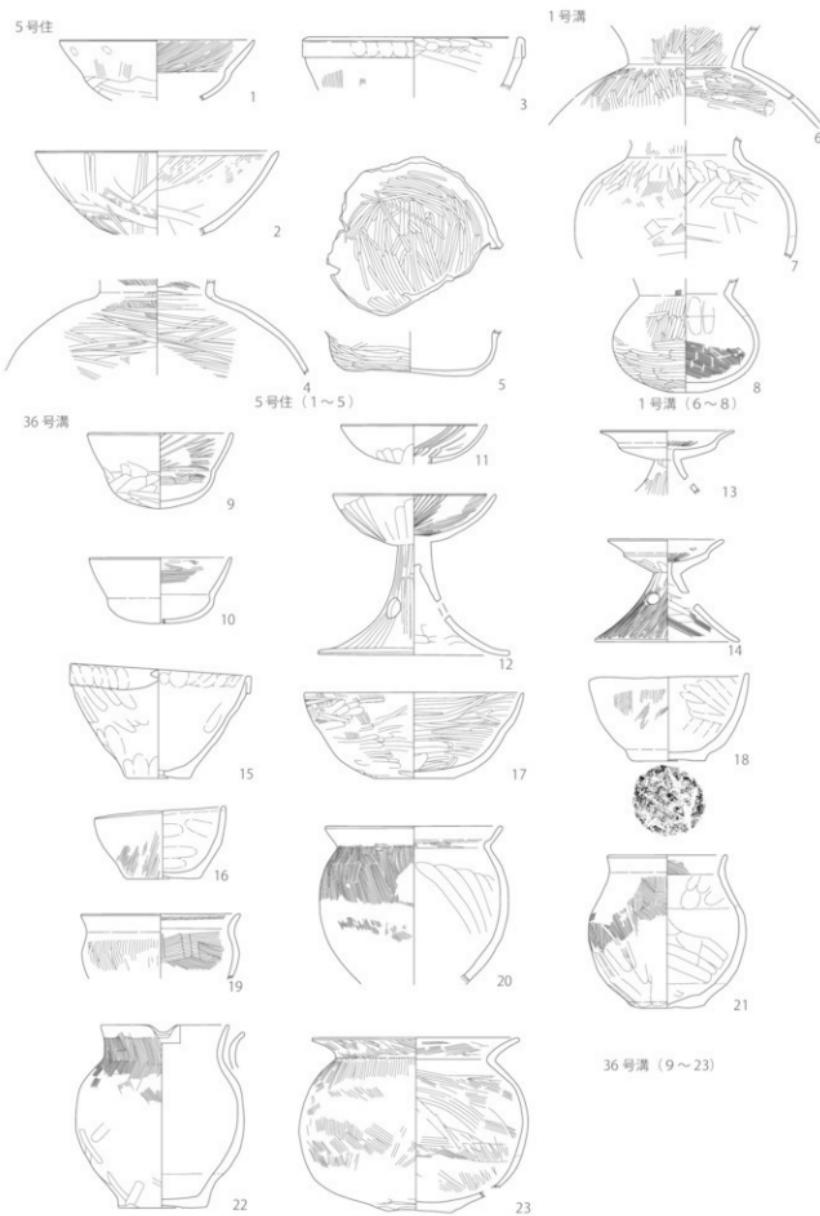


3号住(2~18)



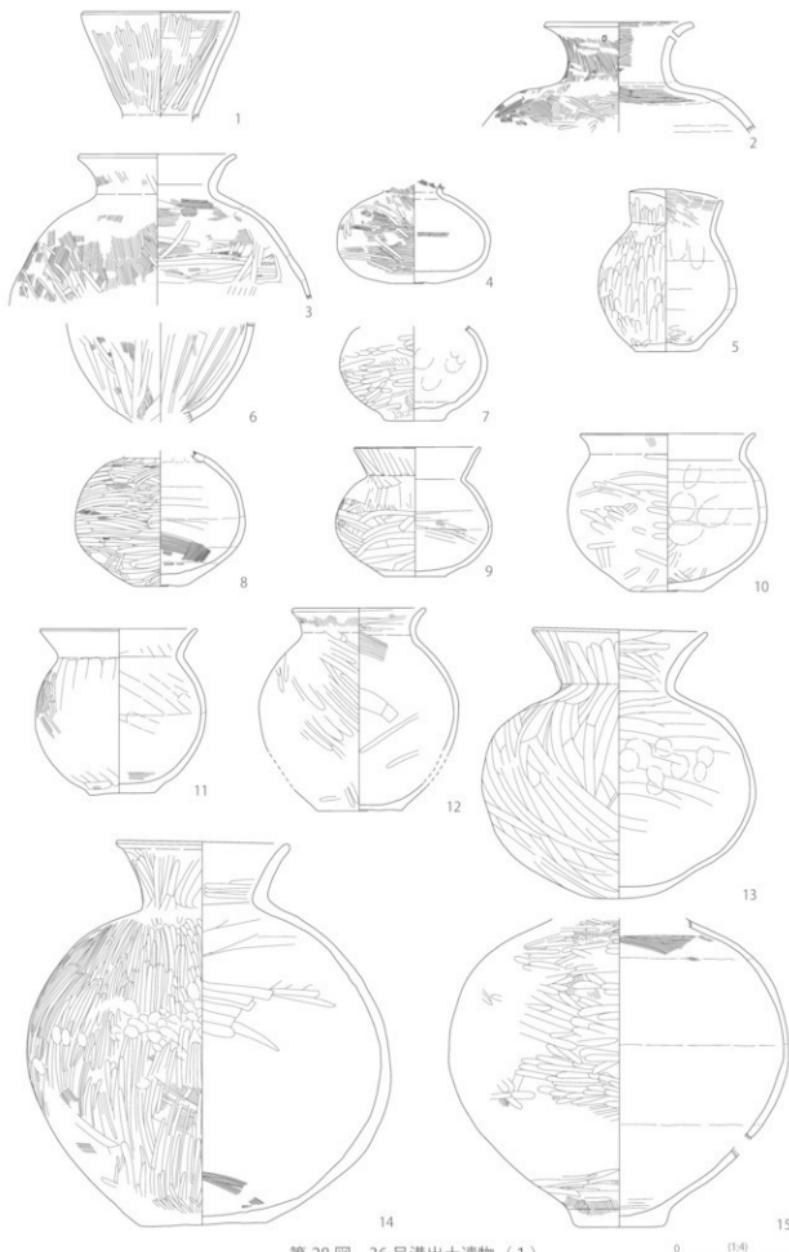
第26図 2・3号住居出土遺物

0 10cm

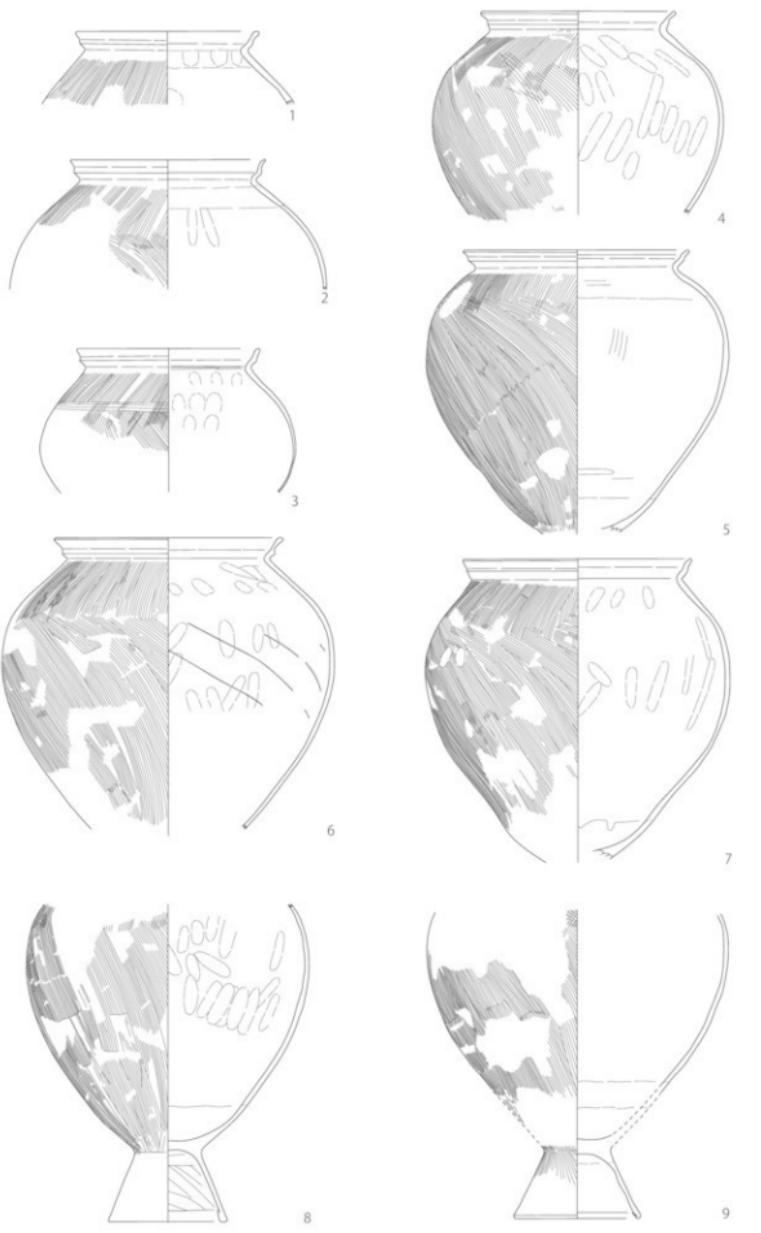


第27図 5号住居・1号溝・36号溝出土遺物

1:4 10cm

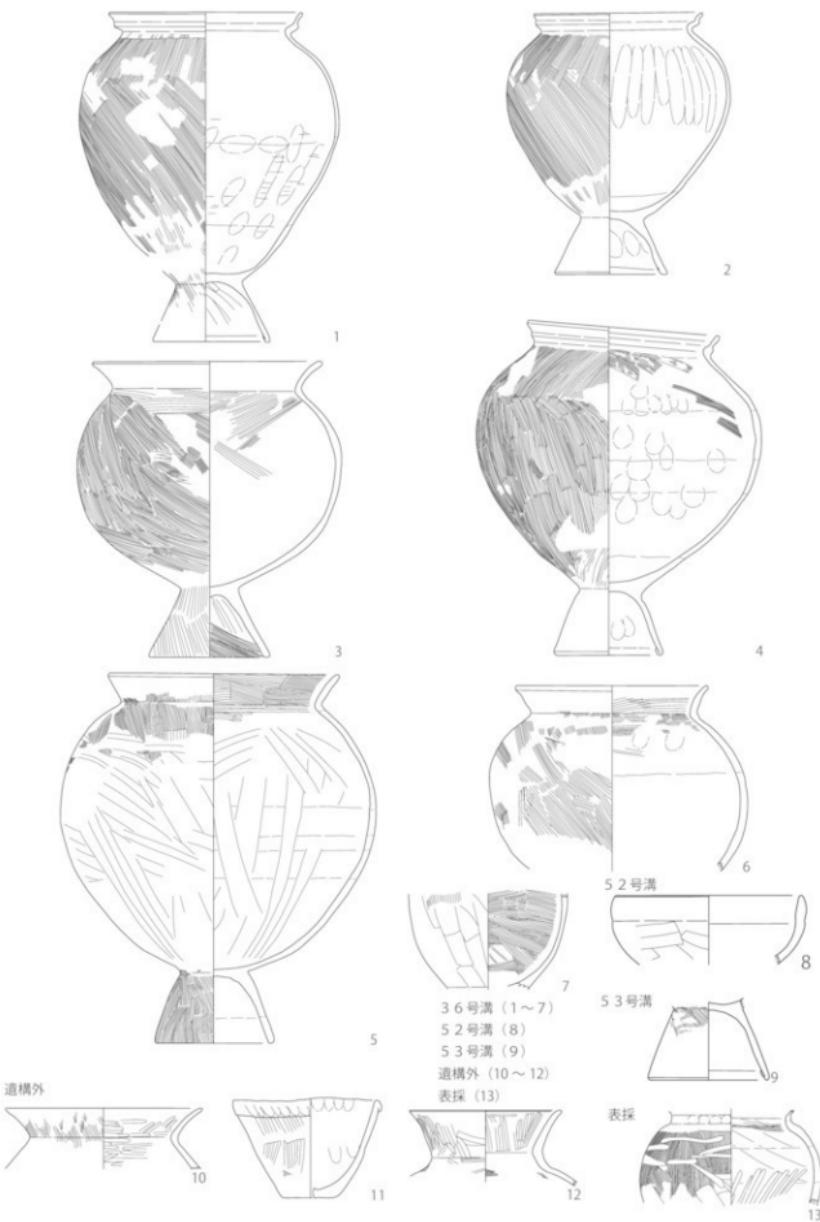


第28図 36号溝出土遺物（1）



第29図 36号溝出土遺物（2）

1:10 10cm



第30図 36・52・53号溝・遺構外・表採遺物

0 10cm

1号土坑



1



1号土坑1 下から
トーンは黒班を示す

第31図 1号土坑出土遺物（1）

0 10cm



1号土坑1 上から



1号土坑1 箋目

第32図 1号土坑出土遺物（2）

0 10cm



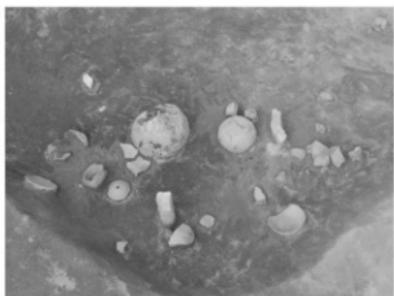
調査前風景



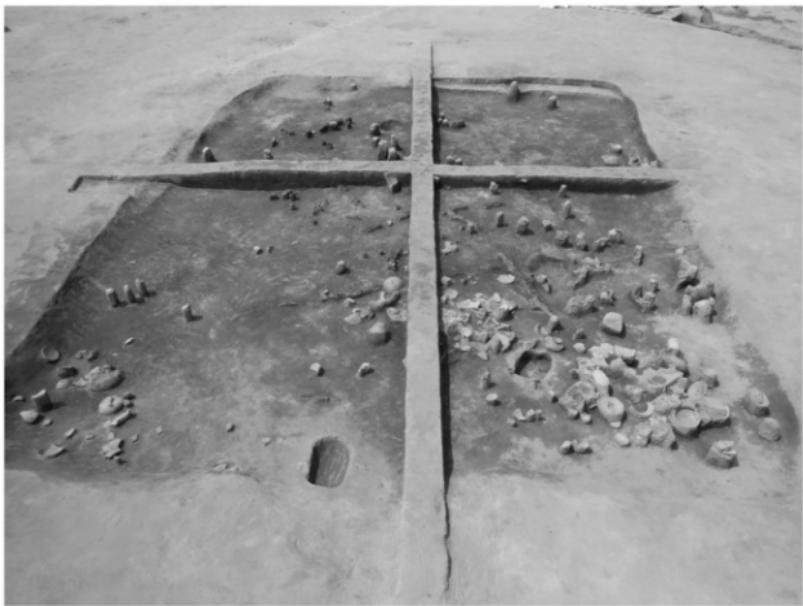
表土掘削



1号住居調査風景



1号住居南西隅遺物出土状況



1号住居遺物出土状況（南から）

写真図版 2



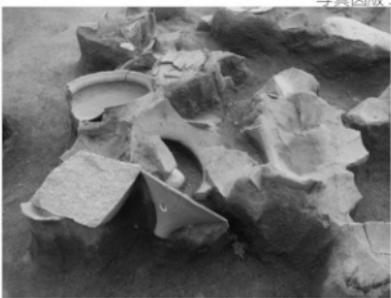
1号住居遺物出土状況（南から）



1号住居遺物出土状況（東から）



1号住居出土物出土状況（西から）



1号住居出土遺物（24-2、24-15など）



1号住居出土遺物（24-13）



1号住居出土遺物（24-11）



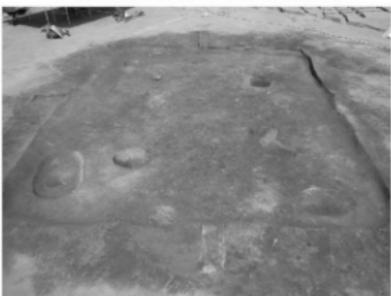
1号住居 1ピット土層断面



1号住居 1ピット出土ミニチュア土器（24-7）



1号住居出土層断面（南から）



1号住居完成状況（南から）



2号住居遺物出土状況（北から）



3・4号住居床面棟出状況（東から）



3号住居調査風景



3号住居遺物出土状況（北から）



3号住居遺物出土状況（南から）



3号住居出土遺物（26-17）



3号住居炉跡模出状況



3号住居炉跡土層断面



3・4号住居土層断面（南から）



3号住居完成状況（北から）

写真図版 6



5号住居土層断面（南東から）



5号住居完掘状況（南東から）



5号住居遺物出土状況（東から）



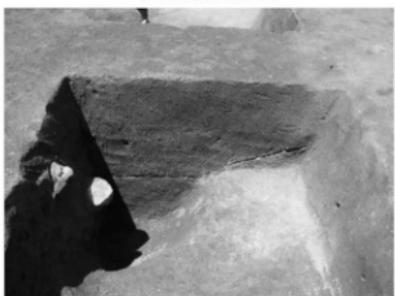
5号住居炉跡土層断面



1号溝発掘状況（東から）



1号溝A-A'土層断面（東から）



1号溝B-B'土層断面（東から）



1号溝C-C'土層断面（東から）



並行溝群発掘状況（西から）



並行溝群調査風景



並行溝群完掘状況（北西から）



並行溝群完掘状況（北東から）



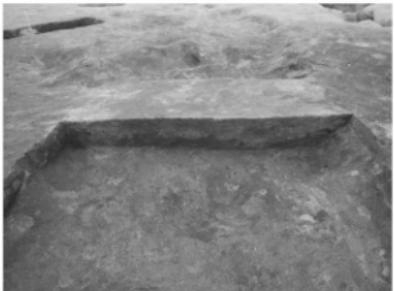
35号溝完成状況（東から）



35号溝A-A'土層断面（東から）



35号溝B-B'土層断面（東から）



31号溝土層断面（北東から）



33号溝遺物出土状況（東から）



34号溝完成状況（北東から）



36号溝遺物出土状況（東から）



36号溝土層断面（南から）



36号溝遺物出土状況（北から）



36号溝遺物出土状況（南から）



36号溝出土遺物（30-3）



36号溝出土遺物（28-13）



36号溝出土遺物（28-2）



36号溝調査風景



36号溝縛集中部分（南から）



36号溝縛集中部分出土遺物（28-11）

写真図版 12



36号溝出土遺物 (29-3)



36号溝出土遺物 (28-9)



36号溝出土遺物 (28-4)



36号溝出土遺物 (28-12)



36号溝完掘状況 (南から)



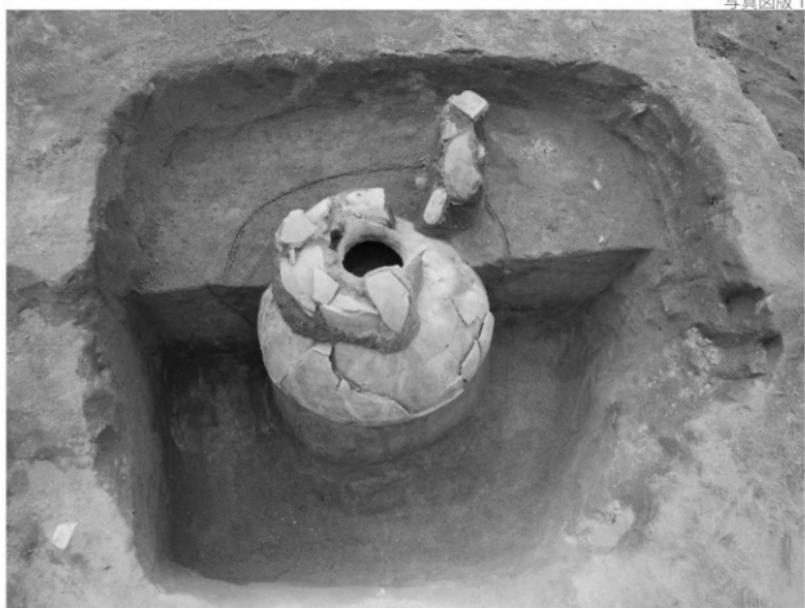
40号溝・22～25ピット完掘状況 (北から)



調査区北壁と24号溝土層断面 (南から)



空撮状況

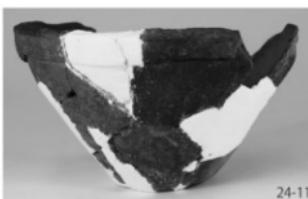
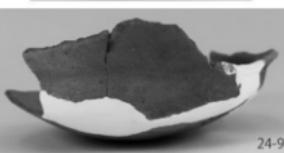


1号土坑検出状況（北から）(31-1)



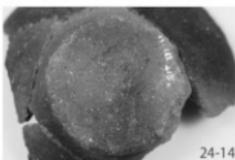
1号土坑土層断面（北から）

写真図版 14

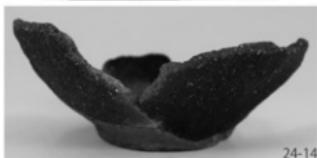


24-1 ~ 13 1号住居

24-14～24 1号住居



24-14



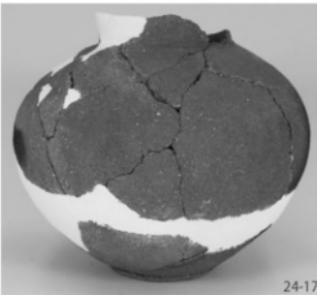
24-14



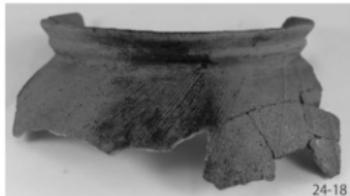
24-15



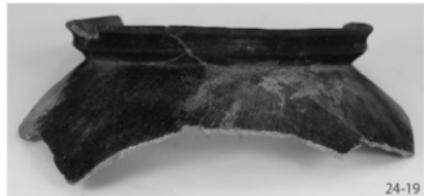
24-16



24-17



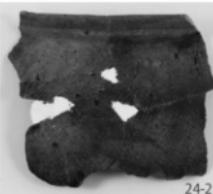
24-18



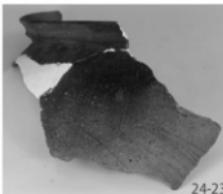
24-19



24-20



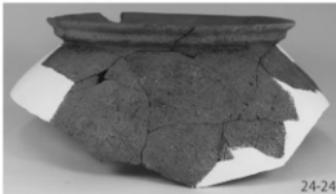
24-21



24-23



24-22



24-24



24-25



24-26

24-25 ~ 25-4 1号住居



25-1



25-2



25-3



25-4



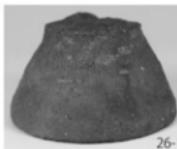
25-5



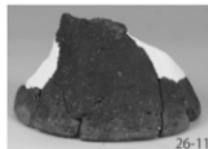
25-6



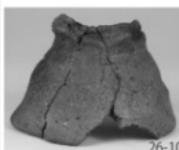
25-7



26-1



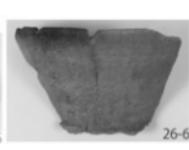
26-11



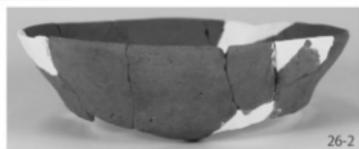
26-10



26-5



26-6



26-2



26-7

25-5 ~ 25-7 1号住居

26-1 2号住居

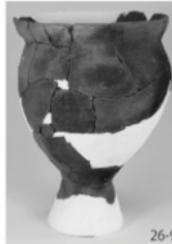
26-2 ~ 26-11 3号住居



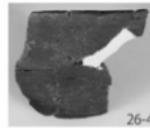
26-3



26-8



26-9

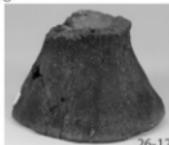


26-4



26-4

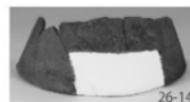
写真図版 18



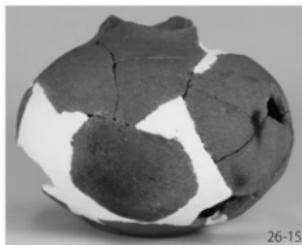
26-12



26-13



26-14



26-15



26-16



26-17



26-18



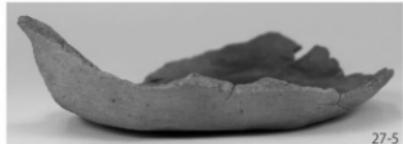
27-1



27-4



27-2



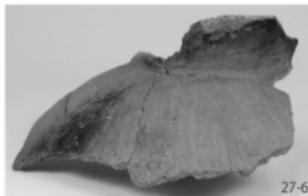
27-5



27-3

26-12 ~ 18 3号住居

27-1 ~ 5 5号住居



27-6



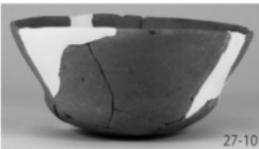
27-7



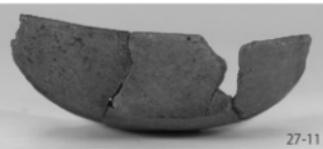
27-8



27-9



27-10



27-11



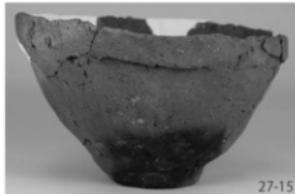
27-12



27-13



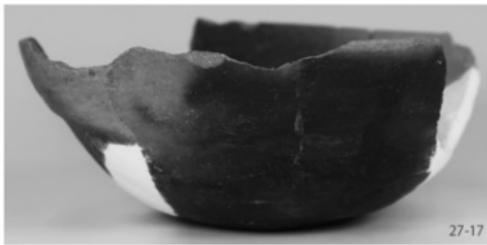
27-14



27-15



27-16



27-17



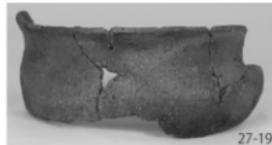
27-18

27-6～8 1号溝

27-9～18 36号溝

27-18 木葉痕

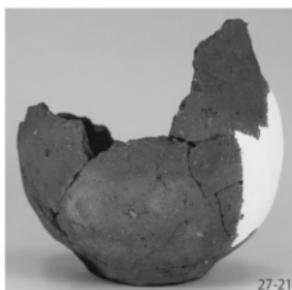
写真図版 20
27-19 ~ 28-6 36号溝



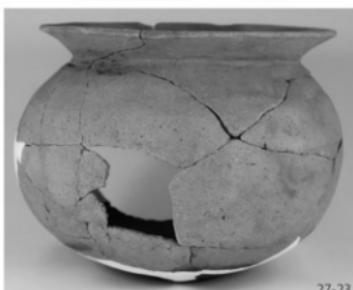
27-19



27-20



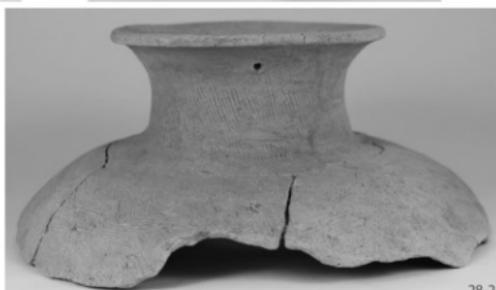
27-21



27-23



27-22



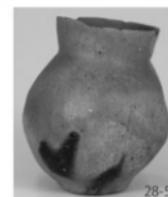
28-2



28-1



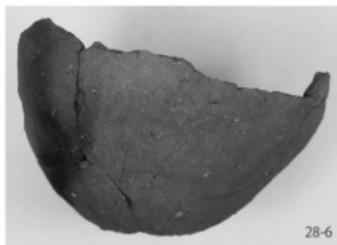
28-4



28-5

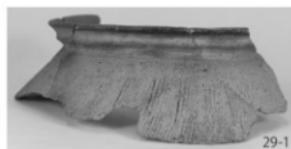
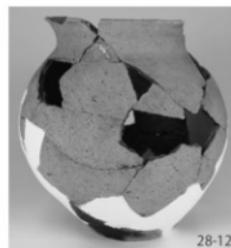
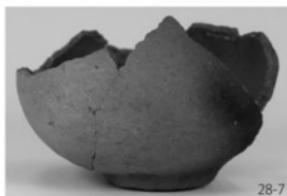


28-3



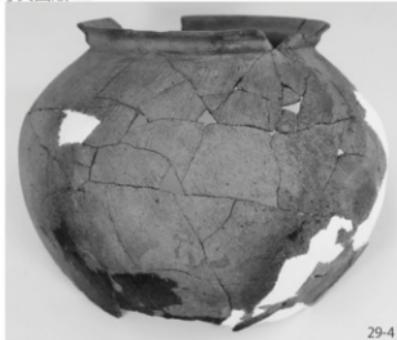
28-6

写真図版 21



28-7 ~ 29-3 36号満





29-4～8 36号溝



29-9～30-5 36号満

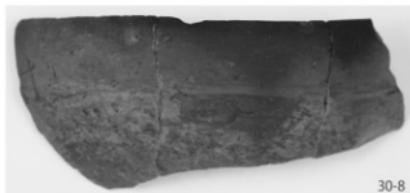




30-6



30-7

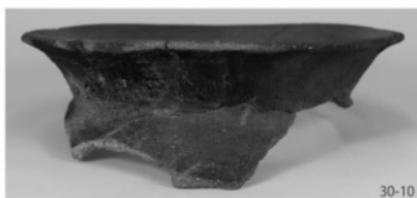


30-8

- 30-6～7 36号溝
30-8 52号溝
30-9 53号溝
30-10～12 道構外
30-13 表採
31-1 1号土坑



30-9



30-10



30-11



30-12



31-1



30-13

報告書抄録

ふりがな	くまのはったんだいせき
書名	熊野八反田遺跡
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 18 集
編著者名	入江俊行・黒沼保子・伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香・パンダリ・スダル・シャン
編集機関	甲州市教育委員会
所在地	〒 404-8501 山梨県甲州市塙山上於曾 1085-1 電話 0553-32-5097
発行年月日	平成 27 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	世界測地系 北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くまのはったんだいせき 熊野八反田遺跡	こうとうしらはんとうのまの 甲州市塙山熊野 くわざわさんやま 字八反田 958-1, 958-3,959-1, 966-1,966-3,966 8,966-9	19213	塙 24	35° 41' 27"	138° 43' 46"	平成 25 年 7 月 10 日～ 9 月 26 日	約 1600m ²	学校給食施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊野八反田遺跡	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡・溝・土坑・耕作痕状(畝状)遺構・小穴	土師器	焼失住居・煙作関連遺構・多量の土師器を伴う流路遺構など

要 約	調査の結果、竪穴住居跡 5 軒、溝 58 本（耕作痕状遺構・流路含む）、大型壺埋納土坑 1 基、小穴 41 基が検出された。今回発見された遺構は、ほぼ古墳時代前中期（4 世紀後半）に属するもので、一辺 6～7 m 規模の大型の竪穴住居、耕作痕状遺構、多量の完形土器を含む土師器が検出された流路跡などが特に注目される。大型壺埋納土坑は、この流路と関連のある遺構で、おそらくは流路の埋没に際して埋められたものと考えられる祭祀遺構であり、集落、生産、祭祀など、様々な性格の遺構が検出された。
-----	--

山梨県甲州市

熊野八反田遺跡

—学校給食センター建設に伴う発掘調査報告書—

2015

編集 甲州市教育委員会 生涯学習課

住所 山梨県甲州市塙山上於曾 1085-1

電話 0553-32-5097

発行 甲州市教育委員会

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 島南堂印刷所

